

京都大学シニアキャンパス（2005～2007年）実施報告

京都大学シニアキャンパス（2005～2007年）実施報告

— 参加者の意識調査の分析から —

前平 泰志・渡邊 洋子・武田 一浩・元根 朋美・柴原 真知子・辻 喜代司

Report on Kyoto University Senior Campus

— From the analysis of the questionnaire of participants —

Yasushi MAEHIRA・Yoko WATANABE・Kazuhiro TAKEDA
Tomomi MOTONE・Machiko SHIBAHARA・Kiyoshi TSUJI

はじめに

1. シニアキャンパス参加者アンケート結果
2. 参加者アンケート（2005～2007年）分析
3. 応募理由（2005～2007年）分析
4. 応募はがき・感想分析
5. 新聞報道について

はじめに

「京都大学シニアキャンパス」は、これまで、本学の社会貢献事業の一環として、2005年から2007年にわたって毎年9月に宿泊形式を伴う社会人への生涯学習として行われてきた。以下は3ヵ年のシニアキャンパスの実施報告を総括したものである。

i) 目的 「社会において中・高年期にある生活者として経験をつんだ人々に、本学の所有するさまざまな人的、物的、知的資源を基盤にして、多様な学習機会を提供し、それによって、新たな知の創造と出会いの場としての本学の生涯学習社会への貢献を果たすこと。」

上記の目的は、「京都大学シニアキャンパス実施検討会」の要項に記載されている。すでにこれに先立って2005年3月26日―28日、JTBの受託研究を受けて教育学研究科の主催の下で「社会に開かれた京都大学をめざして」というテーマで実験的に試行した事業を全学的に展開したものである。

その経験を踏まえて、シニアキャンパスの構想にあたっては、以下のような4点を留意した。第1番目に、本学で学びたいと思っている成人（シニア）が潜在的にたくさんいること、そして本学に対する多様な要望があること、そしてこれらの要望にどのような応えることができるかが全学のシニアキャンパスの課題の出発点になった。

第2番目に、成人は、本来自分達の学びや人生の経験を誰かに聴いてもらいたいと思っている。従来の「公開講座」の様式とはひと味違う学習の方法や内容の工夫が必要と思われた。このことがグループディスカッションやワークショップの形式を導入することやフィールド学習に繋がった。

3番目は、京大のサポーターを獲得することに貢献できることの意義である。シニアキャンパスを実施することで、京大がより身近に感じられ、本学のイメージアップを図ることができ、ひいては京大への共感者を増やしていくことに大きな貢献が期待できる。

最後に、本学の教職員や学生にとっても、シニアと呼ばれる社会人が来学し、たとえ短期間であっても、社会人と関わることは自らの研究や問題意識を問い直すよい機会であると思われる。

ii) 実施日 2005（平成18）年9月27日（火）～30日（金）

2006（平成19）年9月19日（火）～22日（金）

2007（平成19）年9月18日（火）～21日（金）

キャンパス内の講義室が使用しやすいことと、職員の協力体制を求めるために、本学の夏期休暇中の平日を実施期間に定めた。残暑がまだ強く残る期間であったが、天気もほとんど崩れず、この時期を選んだのは適切であった。

iii) テーマ 2005年 「交響する身体―ひと・もの・自然を考える」

2006年 「交響する身体―ひと・もの・自然の学びを編みなおす」

2007年 「交響する身体一ひと・もの・自然が奏でる第三楽章」

3ヵ年間で、メインテーマは変えなかった。サブテーマは、毎年若干変化をもたせるように工夫した。結果的に本学のシニアキャンパスのイメージをよく表現するキャッチフレーズとなったようである。受講者のなかにこのテーマに魅かれて参加申し込みをしたものが少なくなかった。参加者の感想の中にも、「交」「響」「身体」という言葉がよく使われているが、その言葉に仮託して自らの学びや人生を再度見直してみようとする想いがあるであろう。「第三楽章」については、人生の「第三期」と結びつけたり、次への学び＝「第四楽章」へとシニアキャンパス自身の継続の意味に理解した参加者も少なくなかった。「ひと・もの・自然」は、提供されたプログラム内容の多様性を表したものと理解する受講者も多くいた。

iv) 参加者 北は北海道から南は沖縄まで全国から集まった。初年度及び2年度は原則として宿泊施設に宿泊することを条件に参加を受け入れたが、3ヵ年を通して京都在住者が相対的に多数を占めた。また年齢層も40代から80代までの幅広い「シニア」が参加した。参加者の感想はアンケート等別紙を参照のこと。

v) 主なプログラム内容

v-1. 「講義」 基本的に第2日目、第3日目の午前中、二つの講義をあてた。いずれの講義も高度な内容を分かりやすく、面白く伝えるもので、参加者に好評であった。

第1年目はひとコマ80分（8：50～10：10）で行ったが、2年目からひとコマ70分に変更した。あわせて開始時刻も10分遅らせることにした（9：00～10：10）。これは、宿泊施設から本学キャンパスまで距離があり、時間に余裕を持って授業に臨んでもらうためである。また、強いモチベーションを持って参加しているシニアではあるが、普段慣れない講義による長時間の集中を持続させるのは難しい。むしろ、講師の先生方には、講義の時間に加えて、質疑応答の時間を十分に取っていただくようお願いしてきた。どの講義もたくさんの質問が出て休憩時間に食いこんでしまうほどであった。

v-2. 「フィールド学習」 本学のユニークな点のひとつである。講義で座学として学んだことをそのままにせずに、キャンパスの外に出て、生きたフィールドの中で確かめ、自らのものにする試みがフィールド学習である。初年度は第2日目、第3日目の午後を各ふたつのプログラムをそれに当てたが、好評につき、2006年度は、第2日目、第3日目の午後各3つのプログラムを行った。また2007年度は、第2日目の午後と第3日目は終日かけてフィールド学習を行う試みを行った。

v-3. 「学びを語る（語り合う）夕べ」

交流タイムは、オリエンテーション後に、7、8人のグループで行われる、参加者とスタッフの顔合わせと情報提供の時間である。全日程への見通しをもち、「顔見知り」を得ることで、

以後の日程参加がスムーズになることをねらったが、能動的な参加姿勢や、そこで出会った仲間と行動をともにする姿が見られるなど、ある程度有効であったと思われる。

第1回・第2回の「学びを語る夕べ」（自由参加）は、参加者と教員・学生スタッフがコーヒーやお茶を片手に、特定のテーマを設けず、各々の学びについて自由に語り合う時間である。「くじ引き」による5, 6人のグループにスタッフが加わり、テーブルごとに「井戸端会議」的に話し合い、最後に全体で話題を共有し合った。大体は、自己紹介に始まり、これまでの人生経験や出会いと学び、講義・フィールド学習の感想などと話が発展していった。参加者は時間を忘れて盛り上がり、その後、連れ立って食事などに出かけて行った。第3回は宿泊をともなうフィールド学習のため、美山町の民宿と京都市内のホテルに分かれたため、「学びを語り合う夕べ」と名称と趣旨を変えて行った。

Ⅴ-4. 「ゼミナール」

第1回・第2回のゼミナールは、シニアキャンパスでの学びをともに振り返り、「これからの学び」と「次の一歩」につなげていくための時間として設けた。グループは、出身地・年代・性別・参加経験などを考慮して事前に編成し、できる限り「初めて話す」人と出会えることを意図した。最初に担当教員が「学びを振り返る」ことの意味と意義、グループディスカッションに必要な姿勢と方法について短いレクチャーを行い、各グループの司会と記録を学生スタッフが担当して、話し合いを進めた。最後に、各グループの代表が話し合い結果についてワークシートをもとに発表し、全体で共有した。ここでの話し合いは、各参加者が、自分にとってのシニアキャンパス体験を何らかの形で整理し、帰宅後の「次の一歩」を具体的に考える機会となったようである。

なお、第3回のゼミナールは、美山町のフィールド学習の関係で1時間に短縮されたため、グループでの話し合いは行わなかった。その代わり、「学びを語る夕べ」を「学びを語り合う夕べ」と変えて、自由な話し合いからグループで講義・フィールド学習を振り返る時間へと変更し、ゼミナールは「学びを分かち合う」（話し合いの結果をグループ代表者が参加者全体に報告する）時間とした。

（前平 泰志・渡邊 洋子）

京都大学シニアキャンパス（2005～2007年）実施報告

1. シニアキャンパス参加者アンケート結果

2005年、2006年、2007年に開催された京都大学シニアキャンパス終了時に毎年受講者に「京都大学シニアキャンパス参加者アンケート」を実施した。

3年間の参加者総数は119名であり、そのうち「京都大学シニアキャンパス参加者アンケート」の回答者総数は、115名、（2005年35名、2006年44名、2007年36名）、そのうち男性は43名、女性は65名、無記入は7名、回収率は97.4%であった。

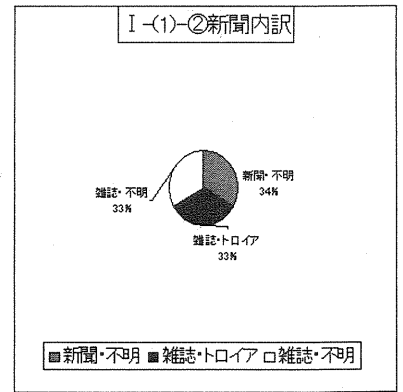
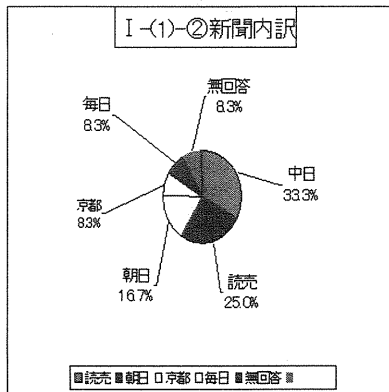
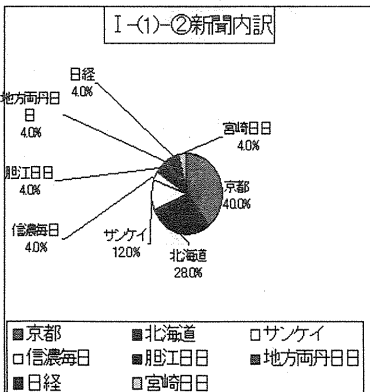
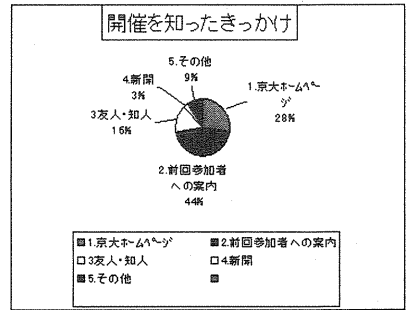
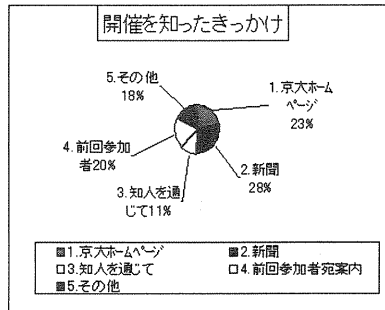
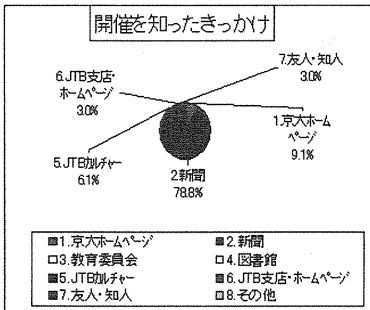
アンケートの内容は、シニアキャンパスの参加理由、シニアキャンパスでの経験と今後の課題などに関する質問の33項目である。このアンケートの分析を2部に分け第1部は単純な集計結果の報告を通して受講者の大まかなプロフィールを、第2部において統計手法を使ってより詳しい分析を行ってみたい。（なお、すでに2004年の生涯教育学講座シニアキャンパスについての報告は同誌の第4号に掲載されているので参照されたい。）

開催を何で知ったか

2005年

2006年

2007年



シニアキャンパスについての情報をどのような手段で知ったかを聞いた結果、2005年は新聞による情報が78.8%で圧倒的である。北海道新聞が28%と多いのは、直接京都大学に問い合わせがあり、記事にしてくれたためである。産経新聞と日本経済新聞の全国紙を除いて、その他の地方新聞社の記事は、共同通信の記事の配信に拠っていると思われる。それ以外については、京大ホームページ9.1%、JTBカルチャーセンター6.1%、JTB支店ホームページ3.0%（2005年は株式会社ジェイティービー・JTBカルチャーサロンの協力を得た。）友人・知人3.0%であるので、新聞の伝播力が際立っている。2006年には各新聞社（朝日新聞社、京都新聞社、共同通信社、産経新聞社京都総局、中日新聞社、毎日新聞社京都支局、読売新聞社京都総局の7社）の後援を得て開催したが、情報の入手手段としての新聞の影響力は、2年目ということもあって、限られたようだ（28%）。京大のHP（23%）と前回参加者への案内（20%）などと拮抗している。2007年になると新聞からの情報は3%（1人、掲載新聞不明）と極端に低くなる。各新聞にシニアキャンパスの情報が掲載されなくなったことが要因に考えられる。雑誌『トロイア』を読んでという参加者もいたが、これは06年のシニアキャンパスを実際に体験した記者が同誌に書いた『大学に行こうー京大シニアキャンパス見聞録』という記事を読んだものである。2007年は、とりわけリピーターが増加する傾向にあるが、これをよく示しているとおおり、前回参加者への案内が圧倒している（44%）。*

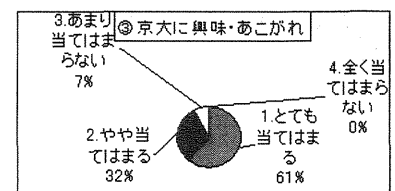
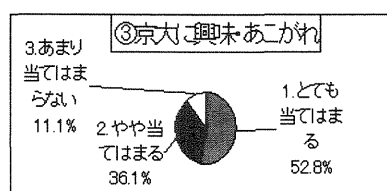
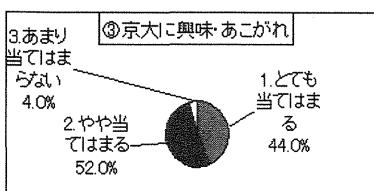
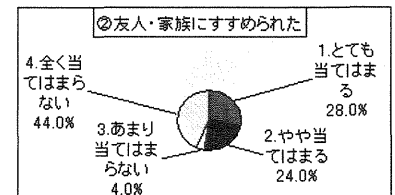
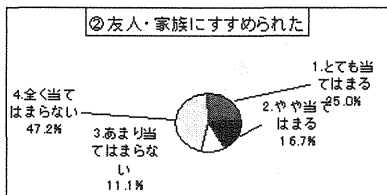
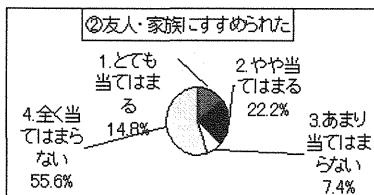
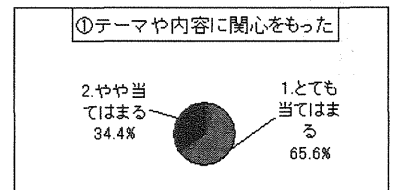
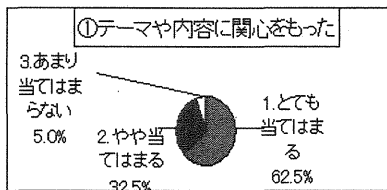
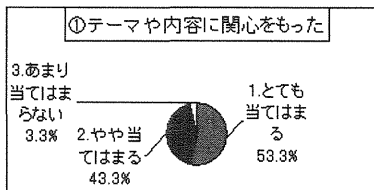
* シニアキャンパスがどのように報道されたかについては、本稿の「新聞報道の分析」に詳しい。

参加しようと思った理由

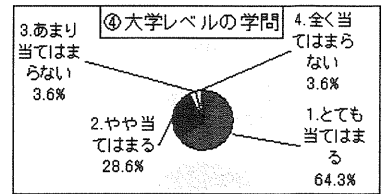
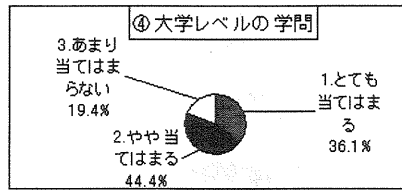
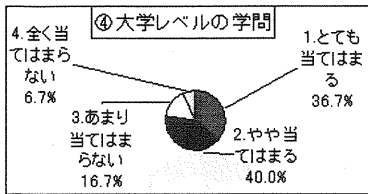
2005年

2006年

2007年



京都大学シニアキャンパス（2005～2007年）実施報告

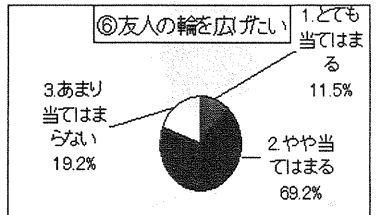
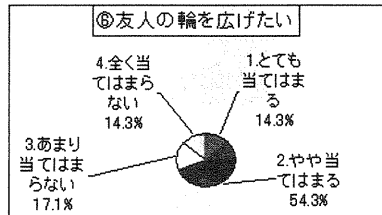
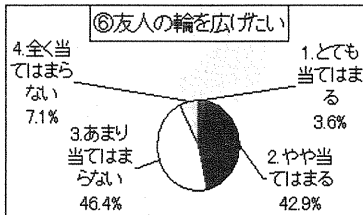
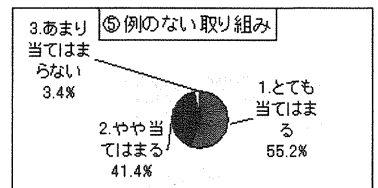
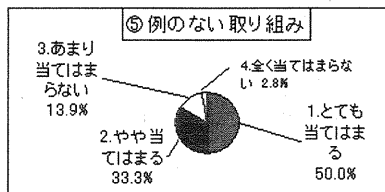
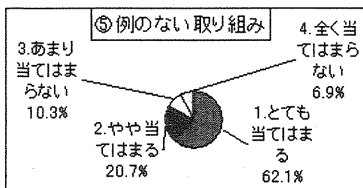


参加しようと思った理由

2005年

2006年

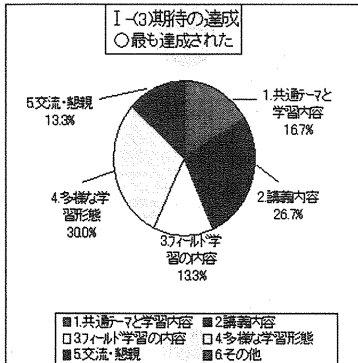
2007年



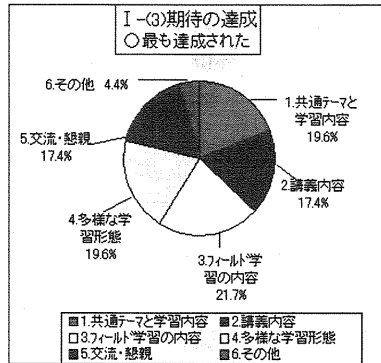
シニアキャンパスへの参加動機を尋ねた設問であるが、2005年から2007年の3年間をみると、①テーマや内容に関心をもった、⑤他には例のない取り組み、③京大に興味やあこがれがあった、が「1. とても当てはまる」の上位を占めている。「2. やや当てはまる」と合わせると、90パーセント近い支持を得ている。次は、④大学レベルの学問に触れたかった、であるが、2007年になると64.3%に上昇している。これは、前回参加者宛の案内を見てきた人14人中7人が「1. とても当てはまる」、4人が「2. やや当てはまる」と答えている（記入なし2人、「全く当てはまらない」1人）ので、リピーターは大学レベルの学問に触れた結果、その経験をまた味わいたいので再び参加しているのではないかと推測できる。その反対に、参加する理由として当てはまっていないものとしては、②友人・家族にすすめられた、⑥友人の輪を広げたい、となっている。シニアキャンパスは参加者にとって京都大学への興味・関心と参加者自身に関心を寄せるテーマと内容が合致した催しであったといえる。

I-(3)参加前の期待の達成度

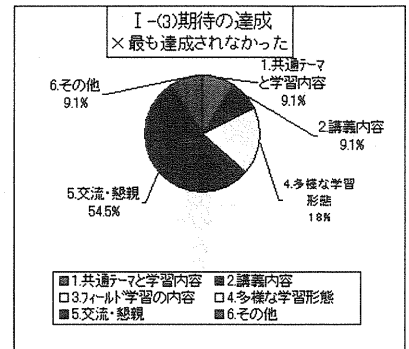
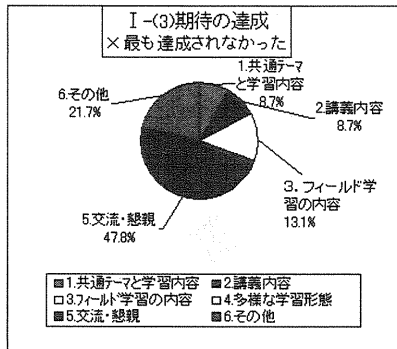
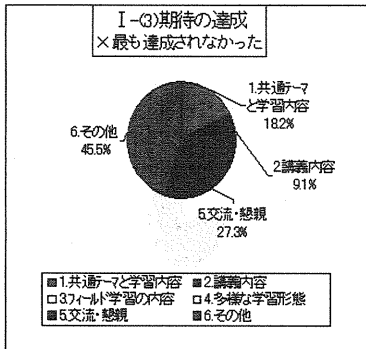
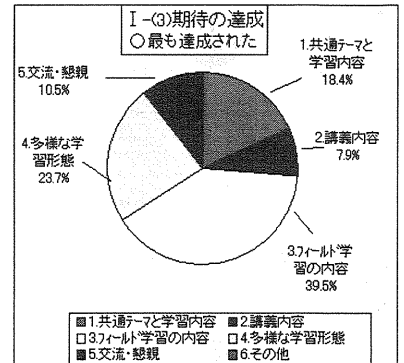
2005年



2006年



2007年



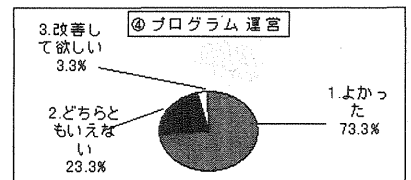
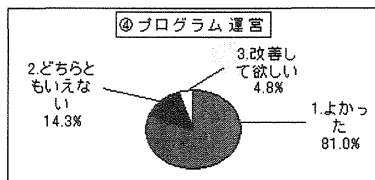
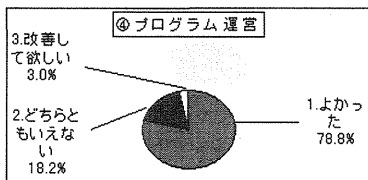
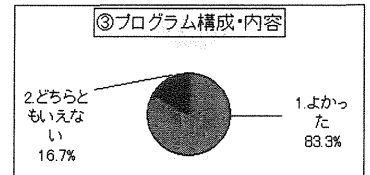
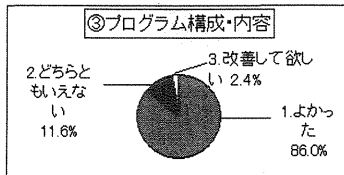
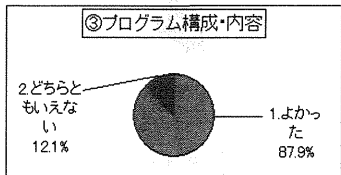
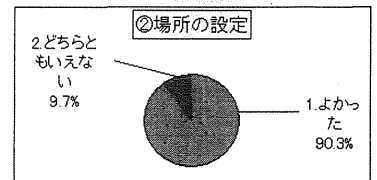
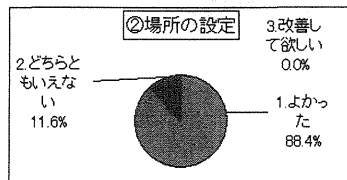
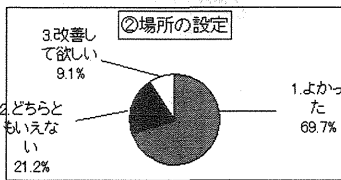
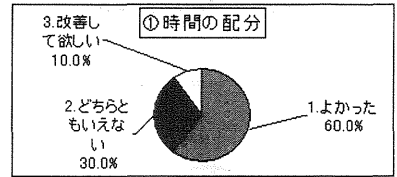
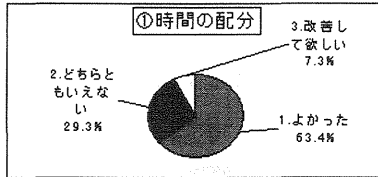
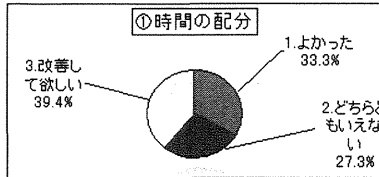
参加前の期待の何が達成されたか、あるいは達成されなかったかを聞いた設問である。2005年は1位④多様な学習形態30.0%、2位②講義内容26.7%であるが、2006年から2007年は、③フィールド学習の内容がそれぞれ21.7%、39.5%と1位と徐々に高まってきている。これは参加者の期待に応えるだけの内容が伴っていたことを表していると考えられるが、実際、05年にはフィールド学習は第2日目及び第3日目の午後に割り当てられ、それぞれ二つ（計3種）のプログラムの中から選択するのであったのに対し、06年にはフィールド学習をAからFまで6つの異なるプログラムを用意し、多様な学習の機会を提供したものに変わった。さらに、07年は、第3日目を終日フィールド学習に充てる日に設定した。加えて、京大の附属施設の訪問見学はもとより、京都薬用植物園（武田薬品株式会社）や黄桜株式会社ビール工場の見学など、京都大学に関係の深い施設を訪問見学したことも、好評を博した一因であろう。それにともないリピーターの期待も年々高まってきていることが窺える。最も達成されないことに答えている者は少数であるが、⑤交流・懇親について物足りなく思っている参加者が05年、06年、07年につれて年々増加していることを考慮に入ると、今後、プログラム内容の質を変えないで、どのようにすればより交流が可能になるかを工夫する必要があるであろう。

II-(6)全体の感想

2005年

2006年

2007年

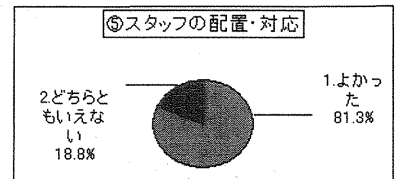
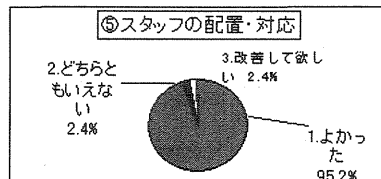
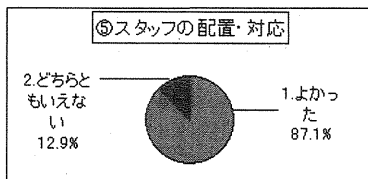


II-(6)全体の感想

2005年

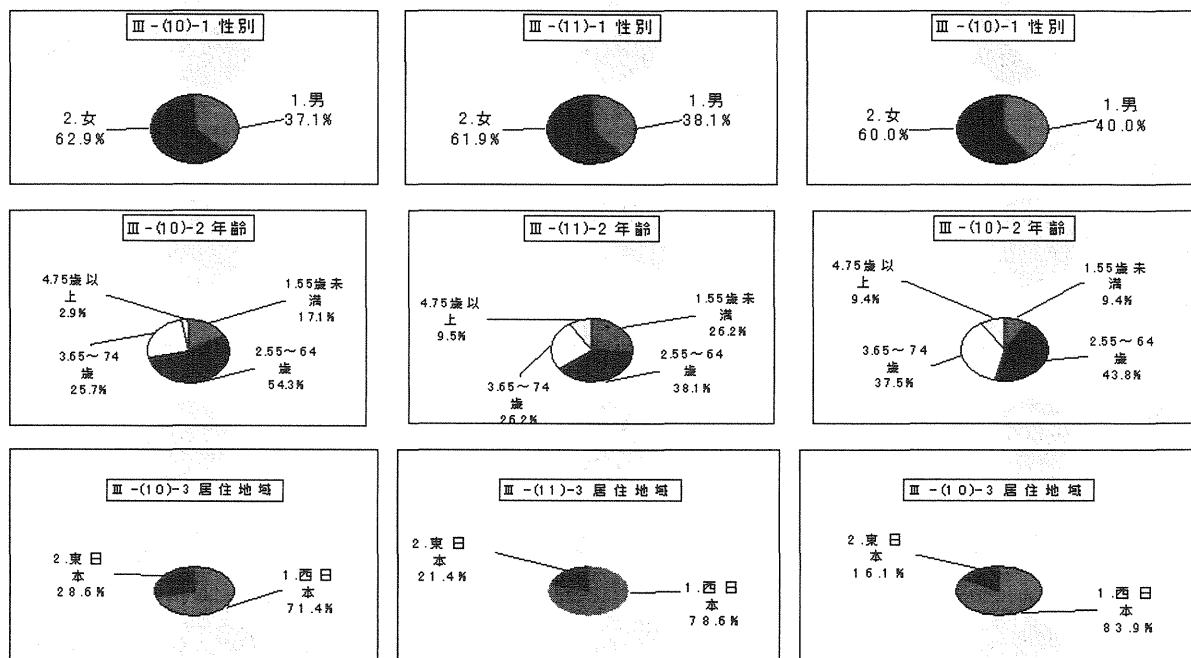
2006年

2007年



②場所の設定、③プログラム構成・内容、④プログラム運営、⑤スタッフの配置・対応は「1. よかった」に○をした者が圧倒的であった。主催者への謝辞の意味がこめられていると思われるので、額面どおりに受け止めることはできないものの、参加者の満足度は非常に高いと考えられる。とりわけ、⑤スタッフの配置・対応は極めて高い満足度である。職員や学生・院生の参加者への献身的な対応がこの数字になって表れていると言えよう。2005年は①時間の配分「1. よかった」が33.3%であったが、2006年から「1. よかった」が60%を超えている。

2005年の講義時間が80分であったものを2006年から70分に変更したので、「1. よかった」が増加した要因のひとつと考えられる。「もう少し自由時間が欲しい」という自由記述の意見があるので次回の課題としたい。



2005年から2007年を通してみると概ね、女性6割、男性4割の構成は変わらない。

2005年から2007年を通して年齢層では55歳から64歳が1位を占め、65歳から74歳が2位である。参加者の最高年齢は83歳で、最も若い参加者は46歳だった。シニアと言っても年齢に下限や上限をつけることの意味はあまりないことがよくわかる。2006年、2007年と75歳以上の参加者が1割もいることも、このことを裏付けている。参加者の居住地域は西日本に偏在している。とはいえ、3年間をとおしてみると、北は北海道から南は沖縄まで人数は多くなくとも参加者がいることを考えると、アクセスの問題は、時間や交通手段等の問題よりも、それ以上に全国的な広報活動を効果的に実施する方法の検討が大きな課題となっているのではないだろうか。

(前平 泰志・武田 一浩)

2. 参加者アンケート（2005～2007年）分析

はじめに

データの集計・分析は、統計ソフト「エクセル」および「SPSS」を用いた。

本レポートでは、最初にシニアキャンパス参加者の参加理由の特徴を分析し、続いて性別・年齢と参加理由の関係を調べ、最後にどのような参加理由が参加者の求める講座や達成要素の強さと結びつくのか分析した。

1 京都大学シニアキャンパス参加者の参加理由の傾向

1.1 京都大学シニアキャンパス参加者の参加理由の傾向性

京都大学シニアキャンパス参加者の参加理由の傾向性を分析するために、「京都大学シニアキャンパス参加者アンケート」の質問項目 I-（2）参加理由についてたずねている 7 項目の質問項目のうち、「⑦その他」を除く 6 項目を用いて、因子分析を行った。因子の抽出には主因子法を用いた。因子数は、固有値 1 以上の基準を設け、さらに因子の解釈の可能性も考慮して 3 因子とし、バリマックス回転を行った。その結果、3 因子が抽出された。（表 1）さらに、信頼性分析により各因子の信頼性係数 α を求めたところ、第 1 因子は $\alpha = 0.479$ 、第 2 因子は $\alpha = 0.496$ であった。

第 1 因子は、「④大学レベルの学問に触れてみたかったから」、「③京都大学に関心があったから」、「①テーマや内容に関心をもったから」に対して負荷が高く、「教養型」因子と命名した。第 2 因子は、「⑤他には例のない取り組みだから」、「②友人・家族等にすすめられた」で負荷が高く、「風見鶏型」因子と命名した。第 3 因子は「⑥友人の輪を広げたかったから」で負荷が高く、「共生型」因子と命名した。

表 1 参加理由に関するバリマックス回転後の因子負荷量
回転後の因子行列(a)

	因子			Cronbach のアルファ
	1 (教養型)	2 (風見鶏型)	3 (共生型)	
I-（24） 理由学問	0.718	-0.004	-0.139	0.479
I-（23） 理由京大	0.655	-0.013	0.209	
I-（21） 理由テーマ	0.23	0.223	0.043	
I-（25） 理由比較	0.067	0.64	-0.066	0.496
I-（22） 理由友人	-0.147	0.589	0.332	
I-（26） 理由友輪	0.028	0.024	0.285	

因子抽出法: 主因子法 回転法: Kaiser の正規化を伴うバリマックス法

a 5 回の反復で回転が収束しました。

表2 参加理由の平均値及び標準偏差

統計量

	I-(21) 理由テーマ	I-(22) 理由友人	I-(23) 理由京大	I-(24) 理由学問	I-(25) 理由比較	I-(26) 理由友輪
度数	有効 102	88	96	94	94	89
	欠損値 15	29	21	23	23	28
平均値	1.43	2.85	1.53	1.78	1.61	2.34
標準偏差	.554	1.246	.632	.819	.793	.753

表3

説明された分散の合計

因子	初期の固有値			抽出後の負荷量平方和			回転後の負荷量平方和		
	合計	分散の %	累積 %	合計	分散の %	累積 %	合計	分散の %	累積 %
1	1.560	26.003	26.003	1.023	17.056	17.056	1.023	17.056	17.056
2	1.432	23.866	49.870	.855	14.243	31.300	.807	13.458	30.514
3	1.018	16.963	66.832	.214	3.560	34.859	.261	4.345	34.859
4	.833	13.886	80.718						
5	.649	10.815	91.533						
6	.508	8.467	100.000						

因子抽出法: 主因子法

これらの結果から、京都大学シニアキャンパス参加者の参加理由の特徴には、学問や教養を求める「教養型」と周囲の勧めを受けて参加する「風見鶏型」と友人の輪を広げたい「共生型」の3つの傾向があると考えられる。

1.2 参加理由の性別の傾向

シニアキャンパス参加者の参加理由について「とても当てはまる」から「全く当てはまらない」まで程度を含めてたずねた男女別の結果は図1のとおりである。

「とても当てはまる」の項目では、男性は京都大学に関心があった項目（18人）が一番高く、家族・友人のすすめの項目（3人）が一番低く、女性はテーマ・内容に関心をもった項目（41人）が一番高く、友人の輪を広げたい項目（4人）が一番低かった。次に、「やや当てはまる」の項目では、男性女性ともに友人の輪を広げたい項目（男25人、女23人）が一番高く、「とても当てはまる」同様、家族・友人のすすめの項目（男女共4人）が一番低かった。全体的に、「とても当てはまる」項目をみると、女性のほうが男性より多い程度を示しているが、「やや当てはまる」をあわせると、友人の輪を広げたい項目と京都大学に関心があった項目においては、男性の方が、割合が多い程度を示した。また、「全くあてはまらない」項目では、友人の輪を広げたい項目において女性のほうが当てはまらない割合が高い（男1人、女6人）。さらに、大学レベルの学問にふれてみたい項目では女性だけが「全くあてはまらない」と答えている（男0人、女3人）ことから、女性には、友人の輪を求めないタイプと学問性を求めないタイプが存在すると考えられる。

京都大学シニアキャンパス（2005～2007年）実施報告

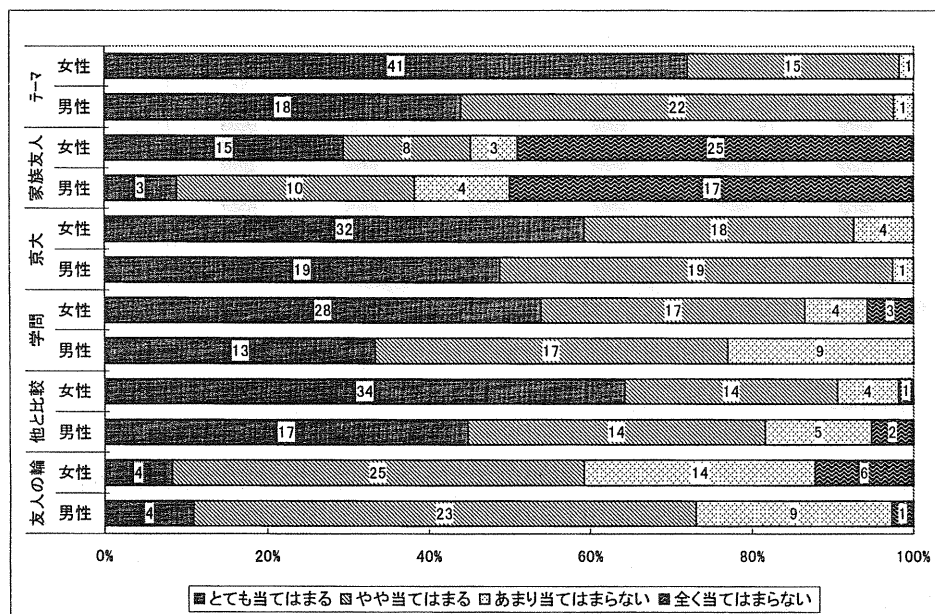


図1 参加理由の男女別内訳

そこで、1で分析した参加理由の因子に男女差が存在するかを検討する。

まず、各因子を因子を持っているか否かに分類するためにシンタックスをかけた。その際、回答方法が「1. とても当てはまる」「4. 全く当てはまらない」と否定的回答のほうが高い数値項目の選択となっているため、シンタックスを行う際、中央値より低い値が1, 高い値が-1となるように式を立てた。次に、因子の有無に分けた3つの参加理由因子と性別との関係性を分析するためにクロス集計を行った（表4）（図2）。

表4 参加理由因子と性別のクロス表

		男性		女性		χ ²
		(%)	(度数)	(%)	(度数)	
主因子1 教養型(有無)	有	50	19	50	19	0.080
	無	31.6	12	68.4	26	
主因子2 風見鶏型(有無)	有	51.4	19	48.6	18	0.055
	無	30.8	12	69.2	27	
主因子3 共生型(有無)	有	23.7	9	76.3	29	0.002
	無	57.9	22	42.1	16	

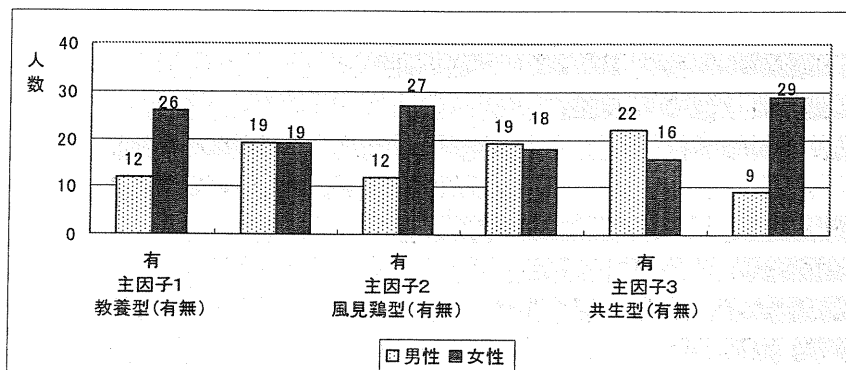


図2 参加理由因子と性別のクロス内訳

この結果、1. 教養型因子については、女性は因子を持ち、男性は因子を持たない傾向がみられた。次に、2. 風見鶏因子についても、女性は因子を持ち、男性は因子を持たない傾向がみられた。3. 共生型因子については、男性は因子を持ち、女性は因子を持たない傾向がみられ、明確な男女差がみられた ($X^2=0.002$) ($r=-0.348$)。

1.3 参加理由の性別、年代別の傾向

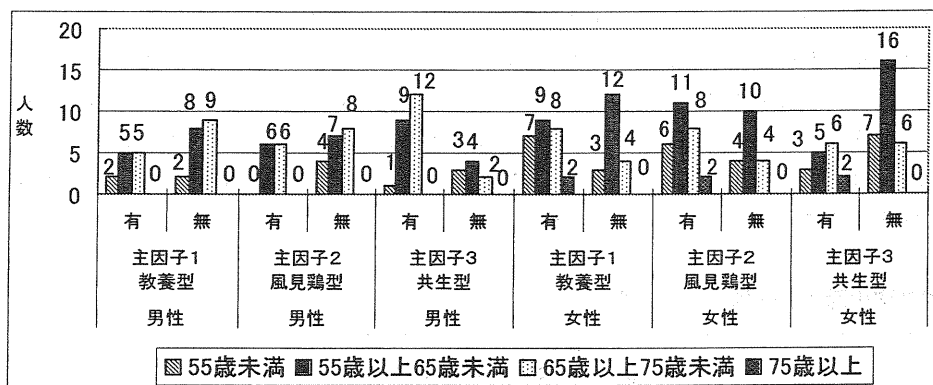


図3 性別参加理由因子と年齢（4分割）とのクロス内訳

1.2 において参加理由の性別の傾向をみたが、さらに年齢別の関係をみるために、因子の有無に分けた3つの参加理由因子と性別と年齢（4分割）の3重クロス集計を行った（図3）。年代別にみると、男性の55歳未満は2. 風見鶏型因子も3. 共生型因子を持たない傾向が高い。一方、55歳以上65歳未満、65歳以上75歳未満、75歳以上の男性は、1. 教養型因子と2. 風見鶏型因子においてはやや因子を持たない傾向にあるのに対し、3. 共生型因子については強く因子を持つ傾向がみられたことから、男性は55歳以上と未満とで参加理由に差異が生じていると考えられる。この差異は、男性の場合、60歳を目安に定年退職という人生の大きな転換期が影響を与えているのではないかとと思われる。 ($X^2=0.061$) ($r=0.343$ $p<0.001$) 次に女性の55

歳未満は、1. 教養型因子と2. 風見鶏因子においては因子を持つ傾向にあるのに対し、3. 共生型因子においては因子を持たない傾向にある。55歳以上65歳の女性は、2. 風見鶏型因子においては差異が見られないが、1. 教養型因子および3. 共生型因子は持たない傾向がみられる。65歳以上75歳未満の女性は、3. 共生型因子において差はみられないが、1. 教養型因子と2. 風見鶏型因子においては因子を持つ傾向がみられる。75歳以上の女性は、全ての因子において因子を持つ傾向がみられたことから、女性の55歳未満と65歳以上75歳未満は近い傾向を示し、女性の55歳以上65歳未満は特に共生型にみられるように、男性の同世代とは逆相関の傾向がみられる（ $r = -0.348$ $p < 0.001$ ）ことがわかる。また、女性の共生型の因子を持つ傾向にある年代は75歳以上のみであることから、女性には定年退職があっても人生の大きな転換期とはならないと思われる。

2 参加理由と達成・未達成感

2.1 3 因子と期待達成との関係

1. 教養型因子と期待達成とのクロス集計の結果、因子の有無で比較すると、1. 教養型因子をもつ受講生は、因子を持たない受講生に対し講義、形態に達成感をより高く感じているのに対し、1. 教養型因子を持たない受講生は、因子を持つ受講生より交流やテーマに達成感をより高く感じている傾向がみられた（表5）。さらに男女で比較すると、1. 教養型因子を持つ女性に、よりフィールドや講義、形態に達成感を感じている傾向がみられた（表6）。

表5 1. 教養型因子と期待達成とのクロス集計

		I-(3)期待達成							合計
		テーマ	講義	フィールド	形態	交流	サロトーク	全て	
主因子1教養型(有無)	度数	7	6	10	9	5	1	2	40
	主因子1教養型(有無)の%	17.5%	15.0%	25.0%	22.5%	12.5%	2.5%	5.0%	100.0%
	I-(3)期待達成の%	58.3%	42.9%	47.6%	45.0%	71.4%	100.0%	100.0%	51.9%
	総和の%	9.1%	7.8%	13.0%	11.7%	6.5%	1.3%	2.6%	51.9%
1	度数	5	8	11	11	2	0	0	37
	主因子1教養型(有無)の%	13.5%	21.6%	29.7%	29.7%	5.4%	0.0%	0.0%	100.0%
	I-(3)期待達成の%	41.7%	51.7%	52.4%	55.0%	28.6%	0.0%	0.0%	48.1%
	総和の%	6.5%	10.4%	14.3%	14.3%	2.6%	0.0%	0.0%	48.1%
合計	度数	12	14	21	20	7	1	2	77
	主因子1教養型(有無)の%	15.6%	18.2%	27.3%	26.0%	9.1%	1.3%	2.6%	100.0%
	I-(3)期待達成の%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	総和の%	15.6%	18.2%	27.3%	26.0%	9.1%	1.3%	2.6%	100.0%

($X^2=0.538$)

表 6 性別 1. 教養型因子と期待達成とのクロス集計

クロス表

Ⅲ－ (11) 性別				Ⅰ－(3)期待達成							合計
				テーマ	講義	フイール ト	形態	交流	サロント ーク	全て	
男性	主因子1 教養型 (有無)	-1	度数	3	3	6	5	2			19
			主因子1教 養型(有 無)の%	15.8%	15.8%	31.6%	26.3%	10.5%			100.0%
			Ⅰ－(3)期 待達成の%	75.0%	60.0%	85.7%	50.0%	50.0%			63.3%
			総和の%	10.0%	10.0%	20.0%	16.7%	6.7%			63.3%
	1	度数	1	2	1	5	2				11
		主因子1教 養型(有 無)の%	9.1%	18.2%	9.1%	45.5%	18.2%				100.0%
		Ⅰ－(3)期 待達成の%	25.0%	40.0%	14.3%	50.0%	50.0%				36.7%
		総和の%	3.3%	6.7%	3.3%	16.7%	6.7%				36.7%
	合計	度数	4	5	7	10	4				30
		主因子1教 養型(有 無)の%	13.3%	16.7%	23.3%	33.3%	13.3%				100.0%
		Ⅰ－(3)期 待達成の%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%				100.0%
		総和の%	13.3%	16.7%	23.3%	33.3%	13.3%				100.0%
女性	主因子1 教養型 (有無)	-1	度数	4	3	4	3	3	1	1	19
			主因子1教 養型(有 無)の%	21.1%	15.8%	21.1%	15.8%	15.8%	5.3%	5.3%	100.0%
			Ⅰ－(3)期 待達成の%	50.0%	33.3%	30.8%	33.3%	100.0%	100.0%	100.0%	43.2%
			総和の%	9.1%	6.8%	9.1%	6.8%	6.8%	2.3%	2.3%	43.2%
	1	度数	4	6	9	6	0	0	0	0	25
		主因子1教 養型(有 無)の%	16.0%	24.0%	36.0%	24.0%	.0%	.0%	.0%	.0%	100.0%
		Ⅰ－(3)期 待達成の%	50.0%	66.7%	69.2%	66.7%	.0%	.0%	.0%	.0%	56.8%
		総和の%	9.1%	13.6%	20.5%	13.6%	.0%	.0%	.0%	.0%	56.8%
	合計	度数	8	9	13	9	3	1	1		44
		主因子1教 養型(有 無)の%	18.2%	20.5%	29.5%	20.5%	6.8%	2.3%	2.3%		100.0%
		Ⅰ－(3)期 待達成の%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%		100.0%
		総和の%	18.2%	20.5%	29.5%	20.5%	6.8%	2.3%	2.3%		100.0%

京都大学シニアキャンパス（2005～2007年）実施報告

カイ2乗検定

III- (11) 性別		値	自由 度	漸近有 意確率 (両側)
男性	Pearson のカイ2乗	1.190 ^a	4	.880
	尤度比	1.230	4	.873
	線型と線型による連関	.087	1	.768
	有効なケースの数	30		
女性	Pearson のカイ2乗	5.872 ^b	6	.438
	尤度比	7.011	6	.320
	線型と線型による連関	.221	1	.639
	有効なケースの数	44		

a. 9 セル (90.0%) は期待度数が 5 未満です。最小期待度数は 1.60 です。

b. 10 セル (71.4%) は期待度数が 5 未満です。最小期待度数は .41 です。

2. 風見鶏型因子と期待達成とのクロス集計の結果（表7）、因子の有無で比較すると、2. 風見鶏型因子を持つ受講生は、因子を持たない受講生よりテーマに達成感をより高く感じているのに対し、2. 風見鶏型因子を持たない受講生は、因子を持つ受講生より交流、形態に達成感をより高く感じている傾向がみられた。さらに男女で比較すると、2. 風見鶏型因子を持つ女性に、よりテーマに達成感を感じている傾向がみられた（表8）。

表7 2. 風見鶏型因子と期待達成とのクロス集計

クロス表

			I-(3)期待達成							合計
			テーマ	講義	フィード	形態	交流	サポート	全て	
主因子2 風見鶏型 (有無)	-1	度数	4	7	11	11	5	0	0	38
		主因子2風見鶏型(有無)の%	10.5%	18.4%	28.9%	28.9%	13.2%	.0%	.0%	100.0%
		I-(3)期待達成の%	33.3%	50.0%	52.4%	55.0%	71.4%	.0%	.0%	49.4%
		総和の%	5.2%	9.1%	14.3%	14.3%	6.5%	.0%	.0%	49.4%
	1	度数	8	7	10	9	2	1	2	39
		主因子2風見鶏型(有無)の%	20.5%	17.9%	25.6%	23.1%	5.1%	2.6%	5.1%	100.0%
		I-(3)期待達成の%	66.7%	50.0%	47.6%	45.0%	28.6%	100%	100%	50.6%
		総和の%	10.4%	9.1%	13.0%	11.7%	2.6%	1.3%	2.6%	50.6%
		合計	12	14	21	20	7	1	2	77
		主因子2風見鶏型(有無)の%	15.6%	18.2%	27.3%	26.0%	9.1%	1.3%	2.6%	100.0%
		I-(3)期待達成の%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100%	100%	100.0%
		総和の%	15.6%	18.2%	27.3%	26.0%	9.1%	1.3%	2.6%	100.0%

($X^2=0.440$)

表 8 性別 2. 風見鶏型因子と期待達成とのクロス集計

クロス表

Ⅲ－ (11) 性別				Ⅰ－(3)期待達成							合計
				テーマ	講義	フィールド	形態	交流	サロントーク	全て	
男性	主因子2 風見鶏型 (有無)	-1	度数	3	3	4	5	3		18	
			主因子2風見鶏型(有無)の%	16.7%	16.7%	22.2%	27.8%	16.7%		100.0%	
			Ⅰ－(3)期待達成の%	75.0%	60.0%	57.1%	50.0%	75.0%		60.0%	
			総和の%	10.0%	10.0%	13.3%	16.7%	10.0%		60.0%	
		1	度数	1	2	3	5	1		12	
			主因子2風見鶏型(有無)の%	8.3%	16.7%	25.0%	41.7%	8.3%		100.0%	
			Ⅰ－(3)期待達成の%	25.0%	40.0%	42.9%	50.0%	25.0%		40.0%	
			総和の%	3.3%	6.7%	10.0%	16.7%	3.3%		40.0%	
	合計	度数	4	5	7	10	4		30		
		主因子2風見鶏型(有無)の%	13.3%	16.7%	23.3%	33.3%	13.3%		100.0%		
		Ⅰ－(3)期待達成の%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%		100.0%		
		総和の%	13.3%	16.7%	23.3%	33.3%	13.3%		100.0%		
女性	主因子2 風見鶏型 (有無)	-1	度数	1	4	6	5	2	0	0	18
			主因子2風見鶏型(有無)の%	5.6%	22.2%	33.3%	27.8%	11.1%	.0%	.0%	100.0%
			Ⅰ－(3)期待達成の%	12.5%	44.4%	46.2%	55.6%	66.7%	.0%	.0%	40.9%
			総和の%	2.3%	9.1%	13.6%	11.4%	4.5%	.0%	.0%	40.9%
		1	度数	7	5	7	4	1	1	1	26
			主因子2風見鶏型(有無)の%	26.9%	19.2%	26.9%	15.4%	3.8%	3.8%	3.8%	100.0%
			Ⅰ－(3)期待達成の%	87.5%	55.6%	53.8%	44.4%	33.3%	100.0%	100.0%	59.1%
			総和の%	15.9%	11.4%	15.9%	9.1%	2.3%	2.3%	2.3%	59.1%
	合計	度数	8	9	13	9	3	1	1	44	
		主因子2風見鶏型(有無)の%	18.2%	20.5%	29.5%	20.5%	6.8%	2.3%	2.3%	100.0%	
		Ⅰ－(3)期待達成の%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	
		総和の%	18.2%	20.5%	29.5%	20.5%	6.8%	2.3%	2.3%	100.0%	

カイ2乗検定

Ⅲ－ (11) 性別		値	自由度	漸近有意確率 (両側)
男性	Pearson のカイ2乗	1.190 ^a	4	.880
	尤度比	1.230	4	.873
	線型と線型による連関	.087	1	.768
	有効なケースの数	30		
女性	Pearson のカイ2乗	5.872 ^b	6	.438
	尤度比	7.011	6	.320
	線型と線型による連関	.221	1	.639
	有効なケースの数	44		

a. 9セル(90.0%)は期待度数が5未満です。最小期待度数は1.60です。

b. 10セル(71.4%)は期待度数が5未満です。最小期待度数は.41です。

3. 共生型因子と期待達成とのクロス集計の結果、因子の有無で比較すると、3. 共生型因子を持つ受講生は、因子を持たない受講生よりテーマに達成感をより高く感じているのに対し、3. 共生型因子を持たない受講生は、因子を持つ受講生より交流に達成感を感じている傾向がみられた（表9）。さらに男女で比較すると、3. 共生型因子を持つ男性に、よりテーマや講義、フィールド、形態に達成感を感じている傾向がみられた（表10）。

表9 3. 共生型因子と期待達成とのクロス集計

			主因子3共生型(有無)とI-(3)期待達成のクロス表						
			I-(3)期待達成						
			テーマ	講義	フィールド	形態	交流	サロントーク	全て
主因子3 共生型 (有無)	-1	度数	5	7	11	10	4	1	1
		主因子3共生型(有無)の%	12.8%	17.9%	28.2%	25.6%	10.3%	2.6%	2.6%
		I-(3)期待達成の%	41.7%	50.0%	52.4%	50.0%	57.1%	100.0%	50.0%
		総和の%	6.5%	9.1%	14.3%	13.0%	5.2%	1.3%	1.3%
	1	度数	7	7	10	10	3	0	1
		主因子3共生型(有無)の%	18.4%	18.4%	26.3%	26.3%	7.9%	.0%	2.6%
		I-(3)期待達成の%	58.3%	50.0%	47.6%	50.0%	42.9%	.0%	50.0%
		総和の%	9.1%	9.1%	13.0%	13.0%	3.9%	.0%	1.3%
合計	度数		12	14	21	20	7	1	2
	主因子3共生型(有無)の%		15.6%	18.2%	27.3%	26.0%	9.1%	1.3%	2.6%
	I-(3)期待達成の%		100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	総和の%		15.6%	18.2%	27.3%	26.0%	9.1%	1.3%	2.6%

(X²=0.538)

表10 性別3. 共生型因子と期待達成とのクロス集計

Ⅲ－(11)性別			Ⅰ－(3)期待達成							合計
			テーマ	講義	フィード	形態	交流	サロトーク	全て	
男性	主因子3 共生型 (有無)	-1 度数	0	1	2	4	2			9
		主因子3共生型(有無) の%	.0%	11.1%	22.2%	44.4%	22.2%			100.0%
		Ⅰ－(3)期待達成の%	.0%	20.0%	28.6%	40.0%	50.0%			30.0%
		総和の%	.0%	3.3%	6.7%	13.3%	6.7%			30.0%
		1 度数	4	4	5	6	2			21
		主因子3共生型(有無) の%	19.0%	19.0%	23.8%	28.6%	9.5%			100.0%
	合計	Ⅰ－(3)期待達成の%	100.0%	80.0%	71.4%	60.0%	50.0%			70.0%
		総和の%	13.3%	13.3%	16.7%	20.0%	6.7%			70.0%
		度数	4	5	7	10	4			30
		主因子3共生型(有無) の%	13.3%	16.7%	23.3%	33.3%	13.3%			100.0%
		Ⅰ－(3)期待達成の%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%			100.0%
		総和の%	13.3%	16.7%	23.3%	33.3%	13.3%			100.0%
女性	主因子3 共生型 (有無)	-1 度数	5	6	9	5	2	1	1	29
		主因子3共生型(有無) の%	17.2%	20.7%	31.0%	17.2%	6.9%	3.4%	3.4%	100.0%
		Ⅰ－(3)期待達成の%	62.5%	66.7%	69.2%	55.6%	66.7%	100.0%	100.0%	65.9%
		総和の%	11.4%	13.6%	20.5%	11.4%	4.5%	2.3%	2.3%	65.9%
		1 度数	3	3	4	4	1	0	0	15
		主因子3共生型(有無) の%	20.0%	20.0%	26.7%	26.7%	6.7%	.0%	.0%	100.0%
	合計	Ⅰ－(3)期待達成の%	37.5%	33.3%	30.8%	44.4%	33.3%	.0%	.0%	34.1%
		総和の%	6.8%	6.8%	9.1%	9.1%	2.3%	.0%	.0%	34.1%
		度数	8	9	13	9	3	1	1	44
		主因子3共生型(有無) の%	18.2%	20.5%	29.5%	20.5%	6.8%	2.3%	2.3%	100.0%
		Ⅰ－(3)期待達成の%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
		総和の%	18.2%	20.5%	29.5%	20.5%	6.8%	2.3%	2.3%	100.0%

カイ2乗検定

Ⅲ－(11)性別		値	自由度	漸近有意確率(両側)
男性	Pearson のカイ2乗	3.197 ^a	4	.525
	尤度比	4.267	4	.371
	線型と線型による連関	3.016	1	.082
	有効なケースの数	30		
女性	Pearson のカイ2乗	1.572 ^b	6	.955
	尤度比	2.189	6	.902
	線型と線型による連関	.395	1	.530
	有効なケースの数	44		

a. 9 セル (90.0%) は期待度数が 5 未満です。最小期待度数は 1.20 です。

b. 10 セル (71.4%) は期待度数が 5 未満です。最小期待度数は .34 です。

2.2 3 因子と期待未達成との関係

1. 教養型因子と期待未達成とのクロス集計の結果、因子の有無で比較すると、1. 教養型因子を持つ受講生は、因子を持たない受講生より講義に未達成感をより感じている傾向がみられた(表11)。さらに男女で比較すると、1. 教養型因子を持つ女性に、講義に未達成感を感じている傾向がみられた(表12)。

京都大学シニアキャンパス（2005～2007年）実施報告

表11 1. 教養型因子と期待未達成とのクロス集計

クロス表

		I-(3)期待未達成												合計
		テーマ	講義	フィールド	形態	交流	達成その他	サロトーク	全て	図書・博物館見学できず	特になし	時間不足	他フィールドの内容も知りたい	
主因子1 教養型 (有無)	-1 度数	4	0	1	0	10	1	1	1	0	3	0	1	22
	主因子1 教養型 (有無) の%	18.2%	.0%	4.5%	.0%	45.5%	4.5%	4.5%	4.5%	.0%	13.6%	.0%	4.5%	100.0%
	I-(3) 期待未達成 の%	100.0%	.0%	100.0%	.0%	62.5%	33.3%	100.0%	100.0%	.0%	75.0%	.0%	100.0%	57.9%
	総和の%	10.5%	.0%	2.6%	.0%	26.3%	2.6%	2.6%	2.6%	.0%	7.9%	.0%	2.6%	57.9%
	1 度数	0	4	0	1	6	2	0	0	1	1	1	0	16
	主因子1 教養型 (有無) の%	.0%	25.0%	.0%	6.3%	37.5%	12.5%	.0%	.0%	6.3%	6.3%	6.3%	.0%	100.0%
	I-(3) 期待未達成 の%	.0%	100.0%	.0%	100.0%	37.5%	66.7%	.0%	.0%	100.0%	25.0%	100.0%	.0%	42.1%
	総和の%	.0%	10.5%	.0%	2.6%	15.8%	5.3%	.0%	.0%	2.6%	2.6%	2.6%	.0%	42.1%
合計	度数	4	4	1	1	16	3	1	1	1	4	1	1	38
	主因子1 教養型 (有無) の%	10.5%	10.5%	2.6%	2.6%	42.1%	7.9%	2.6%	2.6%	2.6%	10.5%	2.6%	2.6%	100.0%
	I-(3) 期待未達成 の%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	総和の%	10.5%	10.5%	2.6%	2.6%	42.1%	7.9%	2.6%	2.6%	2.6%	10.5%	2.6%	2.6%	100.0%

(X2=0.114)

表12 性別1. 教養型因子と期待未達成とのクロス集計

クロス表

Ⅲ－ (11) 性別			Ⅰ－(3)期待未達成											合計		
			テーマ	講義	フィールド	形態	交流	達成その他	サロトーク	全て	図書・博物館見学できず	特になし	時間不足		他フィールドの内容も知りたい	
男性	主因子1 教養型 (有無)	-1 度数	3				7			1		2			13	
		主因子1 教養型 (有無) の%	23.1%				53.8%			7.7%		15.4%			100.0%	
		Ⅰ－(3) 期待未達成 の%	100.0%				63.6%			100.0%		100.0%			76.5%	
	1 度数	主因子1 教養型 (有無) の%	17.6%				41.2%			5.9%		11.8%			76.5%	
		Ⅰ－(3) 期待未達成 の%	100.0%				63.6%			100.0%		100.0%			76.5%	
		総和の%	17.6%				41.2%			5.9%		11.8%			76.5%	
合計	主因子1 教養型 (有無)	-1 度数	3				11			1		2			17	
		主因子1 教養型 (有無) の%	17.6%				64.7%			5.9%		11.8%			100.0%	
		Ⅰ－(3) 期待未達成 の%	100.0%				100.0%			100.0%		100.0%			100.0%	
	1 度数	主因子1 教養型 (有無) の%	17.6%				64.7%			5.9%		11.8%			100.0%	
		Ⅰ－(3) 期待未達成 の%	100.0%				100.0%			100.0%		100.0%			100.0%	
		総和の%	17.6%				64.7%			5.9%		11.8%			100.0%	
女性	主因子1 教養型 (有無)	-1 度数	1	0	1	0	2	1	1		0	1	0	1	8	
		主因子1 教養型 (有無) の%	12.5%	.0%	12.5%	.0%	25.0%	12.5%	12.5%	.0%	12.5%	.0%	12.5%	100.0%	100.0%	
		Ⅰ－(3) 期待未達成 の%	100.0%	.0%	100.0%	.0%	50.0%	33.3%	100.0%	.0%	50.0%	.0%	100.0%	40.0%	40.0%	
		1 度数	主因子1 教養型 (有無) の%	5.0%	.0%	5.0%	.0%	10.0%	5.0%	5.0%	.0%	5.0%	.0%	5.0%	40.0%	40.0%
		Ⅰ－(3) 期待未達成 の%	100.0%	.0%	100.0%	.0%	50.0%	33.3%	100.0%	.0%	50.0%	.0%	100.0%	40.0%	40.0%	
		総和の%	5.0%	.0%	5.0%	.0%	10.0%	5.0%	5.0%	.0%	5.0%	.0%	5.0%	40.0%	40.0%	
	合計	主因子1 教養型 (有無)	-1 度数	0	4	0	1	2	2	0		1	1	1	0	12
			主因子1 教養型 (有無) の%	.0%	33.3%	.0%	8.3%	16.7%	16.7%	.0%		8.3%	8.3%	8.3%	.0%	100.0%
			Ⅰ－(3) 期待未達成 の%	.0%	100.0%	.0%	100.0%	50.0%	66.7%	.0%		100.0%	50.0%	100.0%	.0%	60.0%
		1 度数	主因子1 教養型 (有無) の%	.0%	20.0%	.0%	5.0%	10.0%	10.0%	.0%		5.0%	5.0%	5.0%	.0%	60.0%
			Ⅰ－(3) 期待未達成 の%	.0%	20.0%	.0%	5.0%	10.0%	10.0%	.0%		5.0%	5.0%	5.0%	.0%	60.0%
			総和の%	.0%	20.0%	.0%	5.0%	10.0%	10.0%	.0%		5.0%	5.0%	5.0%	.0%	60.0%

カイ2乗検定

Ⅲ-(11) 性別		値	自由度	漸近有意確率 (両側)
男性	Pearson のカイ2乗	2.853 ^a	3	.415
	尤度比	4.130	3	.248
	線型と線型による連関	.325	1	.569
	有効なケースの数	17		
女性	Pearson のカイ2乗	10.972 ^b	10	.360
	尤度比	14.784	10	.140
	線型と線型による連関	.058	1	.809
	有効なケースの数	20		

a. 7セル(87.5%)は期待度数が5未満です。最小期待度は.24です。

b. 22セル(100.0%)は期待度数が5未満です。最小期待度は.40です。

京都大学シニアキャンパス（2005～2007年）実施報告

2. 風見鶏型因子と期待未達成とのクロス集計の結果、因子の有無で比較すると、2. 風見鶏型因子を持つ受講生は、因子を持たない受講生よりフィールドや形態に未達成感をより感じている傾向がみられた（表13）。さらに男女で比較すると、2. 風見鶏型因子を持つ女性に、テーマやフィールド、形態に未達成感を感じている傾向がみられた（表14）。

表13 2. 風見鶏型因子と期待未達成とのクロス集計

クロス表														
		I - (3) 期待未達成												
		テーマ	講義	フィールド	形態	交流	達成その他	サロトーク	全て	図書・博物館見学でまず	特になし	時間不足	他フィールドの内容も知りたい	合計
主因子2 風見鶏型 (有無)	-1 度数	2	3	0	0	10	1	0	1	1	3	0	0	21
	主因子2風見鶏型(有無)の%	9.5%	14.3%	.0%	.0%	47.6%	4.8%	.0%	4.8%	4.8%	14.3%	.0%	.0%	100.0%
	I - (3) 期待未達成の%	50.0%	75.0%	.0%	.0%	62.5%	33.3%	.0%	100.0%	100.0%	75.0%	.0%	.0%	55.3%
	総和の%	5.3%	7.9%	.0%	.0%	26.3%	2.6%	.0%	2.6%	2.6%	7.9%	.0%	.0%	55.3%
	1 度数	2	1	1	1	6	2	1	0	0	1	1	1	17
	主因子2風見鶏型(有無)の%	11.8%	5.9%	5.9%	5.9%	35.3%	11.8%	5.9%	.0%	.0%	5.9%	5.9%	5.9%	100.0%
	I - (3) 期待未達成の%	50.0%	25.0%	100.0%	100.0%	37.5%	66.7%	100.0%	.0%	.0%	25.0%	100%	100.0%	44.7%
	総和の%	5.3%	2.6%	2.6%	2.6%	15.8%	5.3%	2.6%	.0%	.0%	2.6%	2.6%	2.6%	44.7%
合計	度数	4	4	1	1	16	3	1	1	1	4	1	1	38
	主因子2風見鶏型(有無)の%	10.5%	10.5%	2.6%	2.6%	42.1%	7.9%	2.6%	2.6%	2.6%	10.5%	2.6%	2.6%	100.0%
	I - (3) 期待未達成の%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100%	100.0%	100.0%
	総和の%	10.5%	10.5%	2.6%	2.6%	42.1%	7.9%	2.6%	2.6%	2.6%	10.5%	2.6%	2.6%	100.0%

(X2=0.528)

表14 性別 2. 風見鶏型因子と期待未達成とのクロス集計

		クロス表											
Ⅲ- (11) 性別		I-(3)期待未達成											
		テーマ	講義	フィールド	形態	交流	達成 その他	サロントーク	全て	図書・ 博物館見 学できず	特になし	時間 不足	他フイー ルドの 内容も 知りたい
男性	主因子2 風見鶏型 (有無)	-1 度数	2			6			1		2		
		主因子2風見鶏型(有無)の%	18.2%			54.5%			9.1%		18.2%		
		I-(3)期待未達成の%	66.7%			54.5%			100.0%		100.0%		
		総和の%	11.8%			35.3%			5.9%		11.8%		
		1 度数	1			5			0		0		
	合計	主因子2風見鶏型(有無)の%	16.7%			83.3%			.0%		.0%		
		I-(3)期待未達成の%	33.3%			45.5%			.0%		.0%		
		総和の%	5.9%			29.4%			.0%		.0%		
		度数	3			11			1		2		
		主因子2風見鶏型(有無)の%	17.6%			64.7%			5.9%		11.8%		
		I-(3)期待未達成の%	100.0%			100.0%			100.0%		100.0%		
		総和の%	17.6%			64.7%			5.9%		11.8%		
女性	主因子2 風見鶏型 (有無)	-1 度数	0	3	0	0	3	1	0	1	1	0	0
		主因子2風見鶏型(有無)の%	.0%	33.3%	.0%	.0%	33.3%	11.1%	.0%	11.1%	11.1%	.0%	.0%
		I-(3)期待未達成の%	.0%	75.0%	.0%	.0%	75.0%	33.3%	.0%	100.0%	50.0%	.0%	.0%
		総和の%	.0%	15.0%	.0%	.0%	15.0%	5.0%	.0%	5.0%	5.0%	.0%	.0%
	合計	1 度数	1	1	1	1	2	1		0	1	1	1
		主因子2風見鶏型(有無)の%	9.1%	9.1%	9.1%	9.1%	18.2%	9.1%		.0%	9.1%	9.1%	9.1%
		I-(3)期待未達成の%	100.0%	25.0%	100.0%	100.0%	25.0%	66.7%	100.0%	.0%	50.0%	100.0%	100.0%
		総和の%	5.0%	5.0%	5.0%	5.0%	10.0%	5.0%		.0%	5.0%	5.0%	5.0%
		度数	1	4	1	1	4	3	1	1	2	1	1
		主因子2風見鶏型(有無)の%	5.0%	20.0%	5.0%	5.0%	20.0%	15.0%	5.0%	5.0%	10.0%	5.0%	5.0%
		I-(3)期待未達成の%	100.0%	100%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%		100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
		総和の%	5.0%	20.0%	5.0%	5.0%	20.0%	15.0%	5.0%	5.0%	10.0%	5.0%	5.0%

カイ2乗検定

Ⅲ-(11) 性別		値	自由度	漸近有意確率 (両側)
男性	Pearson のカイ2乗	2.139 ^a	3	.544
	尤度比	3.097	3	.377
	線型と線型による連関	1.188	1	.276
	有効なケースの数	17		
女性	Pearson のカイ2乗	9.226 ^b	10	.511
	尤度比	11.937	10	.289
	線型と線型による連関	.201	1	.654
	有効なケースの数	20		

a. 7 セル (87.5%) は期待度数が 5 未満です。最小期待度数は .35 です。

b. 22 セル (100.0%) は期待度数が 5 未満です。最小期待度数は .45 です。

京都大学シニアキャンパス（2005～2007年）実施報告

3. 共生型因子と期待未達成とのクロス集計の結果、因子の有無で比較すると、3. 共生型因子を持つ受講生は、因子を持たない受講生よりフィールドや交流に未達成感をより感じている傾向がみられた（表15）。さらに男女で比較すると、3. 共生型因子を持つ男性が交流、女性がフィールドに未達成感を感じている傾向がみられた。

表15 3. 共生型因子と期待未達成とのクロス集計

		クロス表												
		I - (3) 期待未達成												合計
		テーマ	講義	フィールド	形態	交流	達成その他	サロントーク	全て	図書・博物館見学できず	特になし	時間不足	他フィールドの内容も知りたい	
主因子3共生型(有無)	-1 度数	2	3	0	1	7	2	1	1	1	1	1	1	21
	主因子3共生型(有無)の%	9.5%	14.3%	.0%	4.8%	33.3%	9.5%	4.8%	4.8%	4.8%	4.8%	4.8%	4.8%	100.0%
	I - (3) 期待未達成の%	50.0%	75.0%	.0%	100.0%	43.8%	66.7%	100.0%	100.0%	100.0%	25.0%	100.0%	100.0%	55.3%
	総和の%	5.3%	7.9%	.0%	2.6%	18.4%	5.3%	2.6%	2.6%	2.6%	2.6%	2.6%	2.6%	55.3%
	1 度数	2	1	1	0	9	1	0	0	0	3	0	0	17
	主因子3共生型(有無)の%	11.8%	5.9%	5.9%	.0%	52.9%	5.9%	.0%	.0%	.0%	17.6%	.0%	.0%	100.0%
	I - (3) 期待未達成の%	50.0%	25.0%	100.0%	.0%	56.3%	33.3%	.0%	.0%	.0%	75.0%	.0%	.0%	44.7%
	総和の%	5.3%	2.6%	2.6%	.0%	23.7%	2.6%	.0%	.0%	.0%	7.9%	.0%	.0%	44.7%
	合計 度数	4	4	1	1	16	3	1	1	1	4	1	1	38
	主因子3共生型(有無)の%	10.5%	10.5%	2.6%	2.6%	42.1%	7.9%	2.6%	2.6%	2.6%	10.5%	2.6%	2.6%	100.0%
	I - (3) 期待未達成の%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
	総和の%	10.5%	10.5%	2.6%	2.6%	42.1%	7.9%	2.6%	2.6%	2.6%	10.5%	2.6%	2.6%	100.0%

(X2=0.597)

表16 性別 3. 共生型因子と期待未達成とのクロス集計

		クロス表												
		Ⅰ-(3)期待未達成												
Ⅲ-(11) 性別		テーマ	講義	フィールド	形態	交流	達成 その他	サロ ンク	全て	図書・ 博物 館見 学でき ず	特にな し	時間 不足	他フ ィー ルドの 内容も 知りたい	合計
男性	主因子3 共生型 (有無)	-1 度数	1			2			1		0			4
		主因子3共生型 (有無)の%	25.0%			50.0%			25.0%		.0%			100.0%
		Ⅰ-(3)期待未 達成の%	33.3%			18.2%			100.0%		.0%			23.5%
		総和の%	5.9%			11.8%			5.9%		.0%			23.5%
	1 度数	2				9			0		2			13
		主因子3共生型 (有無)の%	15.4%			69.2%			.0%		15.4%			100.0%
		Ⅰ-(3)期待未 達成の%	66.7%			81.8%			.0%		100.0%			76.5%
		総和の%	11.8%			52.9%			.0%		11.8%			76.5%
	合計	度数	3			11			1		2			17
		主因子3共生型 (有無)の%	17.6%			64.7%			5.9%		11.8%			100.0%
	Ⅰ-(3)期待未 達成の%	100.0%			100.0%			100.0%		100.0%			100.0%	
	総和の%	17.6%			64.7%			5.9%		11.8%			100.0%	
女性	主因子3 共生型 (有無)	-1 度数	1	3	0	1	4	2	1		1	1	1	16
		主因子3共生型 (有無)の%	6.3%	18.8%	.0%	6.3%	25.0%	12.5%	6.3%	6.3%	6.3%	6.3%	6.3%	100.0%
		Ⅰ-(3)期待未 達成の%	100.0%	75.0%	.0%	100.0%	100.0%	66.7%	100.0%	100.0%	50.0%	100.0%	100.0%	80.0%
		総和の%	5.0%	15.0%	.0%	5.0%	20.0%	10.0%	5.0%	5.0%	5.0%	5.0%	5.0%	80.0%
	1 度数	0	1	1	0	0	1	0		0	1	0	0	4
		主因子3共生型 (有無)の%	.0%	25.0%	25.0%	.0%	.0%	25.0%	.0%	.0%	25.0%	.0%	.0%	100.0%
		Ⅰ-(3)期待未 達成の%	.0%	25.0%	100.0%	.0%	.0%	33.3%	.0%	.0%	50.0%	.0%	.0%	20.0%
		総和の%	.0%	5.0%	5.0%	.0%	.0%	5.0%	.0%	.0%	5.0%	.0%	.0%	20.0%
	合計	度数	1	4	1	1	4	3	1		1	2	1	20
		主因子3共生型 (有無)の%	5.0%	20.0%	5.0%	5.0%	20.0%	15.0%	5.0%	5.0%	10.0%	5.0%	5.0%	100.0%
	Ⅰ-(3)期待未 達成の%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	
	総和の%	5.0%	20.0%	5.0%	5.0%	20.0%	15.0%	5.0%	5.0%	10.0%	5.0%	5.0%	100.0%	

カイ2乗検定

Ⅲ-(11)性別		値	自由度	漸近有意確 率(両側)
男性	Pearson のカイ2乗	4.200 ^a	3	.241
	尤度比	4.300	3	.231
	線型と線型による連関	.325	1	.569
	有効なケースの数	17		
女性	Pearson のカイ2乗	8.021 ^b	10	.627
	尤度比	8.926	10	.539
	線型と線型による連関	.015	1	.904
	有効なケースの数	20		

a. 7 セル (87.5%) は期待度数が 5 未満です。最小期待度数は .24 です。

b. 22 セル (100.0%) は期待度数が 5 未満です。最小期待度数は .20 です。

3. 2. 風見鶏型因子 (女性) と 3. 共生型因子 (女性) の比較

それぞれの参加理由因子と、性別、期待達成、期待未達成のクロス集計を行った結果、2. 風見鶏型因子を持つ女性と 3. 共生型因子を持つ女性との傾向が同じとなった。そこで、2. 風見鶏型因子を持つ女性と 3. 共生型因子を持つ女性との違いは何であるのかを分析するための、他の質問項目とのクロス集計を行った。

3.1 2. 風見鶏型因子（女性）と3. 共生型因子（女性）とII-5 あなたにとってシニアキャンパスとは

質問紙II-5で「シニアキャンパスの4日間は、あなたにとってどんなものだったでしょうか?」と問いかけ、それについて簡潔な自由記述回答を求めたものを、6つの項目に分類した。次に、2. 風見鶏型因子と3. 共生型因子と、先に求めた問II-5の6項目とを性別にクロス集計し、女性のみ抽出し比較したものが図4である（n=86）。X²検定の結果、風見鶏型因子（女性）は0.714であったが、共生型因子（女性）は0.005と差は有意であった。

2. 風見鶏型因子を持つ女性と3. 共生型因子を持つ女性とでは、「リフレッシュ」と「非日常」の項目に明確な差が見られた。2. 風見鶏型因子を持つ女性は、因子を持たない女性に対して「リフレッシュ」と「非日常」の項目が低いのにに対し、3. 共生型因子を持つ女性は、因子を持たない女性に対して「リフレッシュ」と「非日常」の項目が高い。また、「学習意欲」の項目に関しても、3. 共生型因子を持つことで高まることが示唆された。加えて、3. 共生型因子を持つ女性は、因子を持たない女性に比べ、非日常、学習意欲、刺激的、リフレッシュに強い反応を示している。一方、2. 風見鶏型因子を持つ女性は、因子を持たない女性に比べ「刺激的」にのみ若干強い反応を示しているが、全体的に因子を持たない女性に比べ低い反応を示している。よって、これらのことから、3. 共生型因子を持つ女性は、シニアキャンパスを普段の生活とは異世界であり、かつ学習意欲につながるものだと思っており、一方2. 風見鶏型因子を持つ女性には同様の傾向がみられない違いがあると考えられる。

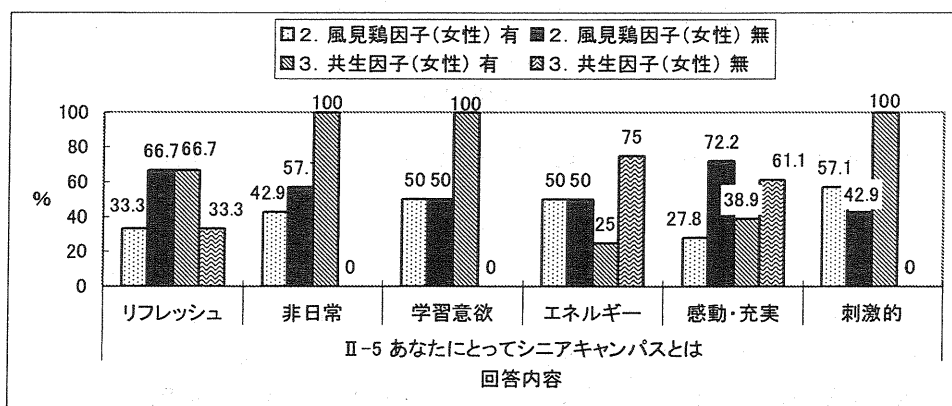


図4 2. 風見鶏型因子（女性）と3. 共生型因子（女性）とII-5のクロス内訳

3.2 2. 風見鶏型因子（女性）と3. 共生型因子（女性）とII-9 経験後の取組み

質問紙II-9で「シニアキャンパスでの経験を踏まえ、今後あなたが取り組んでみたいこと、学んでみたいことがありましたら、どのようなことか、簡潔にお書きください」と問いかけ、それについて自由記述回答を求めたものを、6つの項目に分類した。次に、2. 風見鶏型因子

と3. 共生型因子と、先に求めた問Ⅱ-96項目とを性別にクロス集計し、女性のみ抽出し比較したものが図5である (n=86)。X²検定の結果、風見鶏型因子(女性)は0.013と差は有意であり、共生型因子(女性)は0.752であった。

2. 風見鶏型因子を持つ女性と3. 共生型因子を持つ女性とでは、「具体的内容学ぶ」と「無回答」の項目に明確な差が見られた。2. 風見鶏型因子を持つ女性は、因子を持たない女性に対して「次世代・地域への伝達」と「大学で学ぶ」の項目に強が高いが、これは3. 共生型因子を持つ女性と同じ傾向である。一方、3. 共生型因子を持つ女性が持たない女性に対し強い傾向を示した「具体的内容を学ぶ」は2. 風見鶏型因子を持つ女性には低いこと、さらに「漠然とした学びの欲求」は2. 風見鶏型因子を持つ女性と因子をもたない女性とで差異がみられなかった。これらのことから、2. 風見鶏型因子を持つ女性はシニアキャンパスの経験が次の具体的目的をもった学びへと繋がらず、3. 共生型因子を持つ女性はやや具体性を持ちながら、強い学びの欲求をもっていると考えられる。

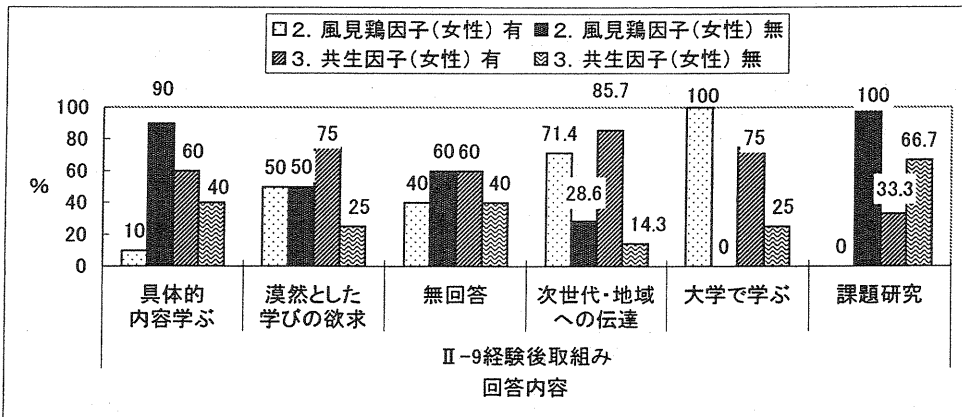


図4 2. 風見鶏型因子(女性)と3. 共生型因子(女性)とⅡ-9のクロス内訳

4 考察

以上のことから、大学レベルの学問や、テーマや内容、京都大学に関心から構成される1. 教養型因子をもった受講生は、形態に満足するが、講義には未達成感を感じている傾向がみられたことから、より高い学問レベルの期待を高く持っていると考えられる。友人・家族にすすめられ、他には例のない取り組みから構成される2. 風見鶏型因子をもった受講生は、テーマに満足するが、フィールドや形態には未達成感を感じている傾向がみられたことから、イベント、非日常体験への期待を高く持っていると考えられる。友人の輪を広げたかったから構成される3. 共生型因子を持った受講生は、男女で異なる傾向性がみられる。共通してテーマに満足するが、男性は交流に未達成感を感じ、女性はフィールドに未達成感を感じている傾向がみられたことから、男性はテーマの中に交流の要素を期待していると考えられる。女性の傾向については2. 風見鶏型との傾向と同じであったが、シニアキャンパスに対する捉え方と、今後への

京都大学シニアキャンパス（2005～2007年）実施報告

取り組みにおいて差異がみられた。友人・家族にすすめられ、他には例のない取り組みから構成される2. 風見鶏型因子を持つ女性は、シニアキャンパス経験後も具体低内容を学ぶことや、課題研究への取り組みよりも、次世代・地域への伝達や大学で学ぶことを掲げているが、シニアキャンパス自体に明確な感情表出はみられなかった。一方、友人の輪を広げなかったから構成される3. 共生型因子を持った3. 共生型因子を持つ女性は、シニアキャンパス経験後も学びへの欲求をもち、またシニアキャンパス自体に明確でポジティブな感情表出があった。他の項目においても、フィールドの継続や語り合いの継続を望み、印象に残ったこととして人との出会いを挙げている。これらのことから、3. 共生型因子を持つ女性は日常でシニアキャンパスのような学習機会を持っておらず、友人の輪を広げたいという参加理由で参加したが、シニアキャンパスをきっかけに学習意欲を持つ要素をもっていると思われる。（元根 朋美）

3. 応募理由（2005～2007年）分析

1 データの概要

2005年、2006年、2007年に開催された京都大学シニアキャンパス受講希望者を対象とした3年間の応募ハガキにある「応募理由」という質問に対する回答の自由記述文をテキストマイニングにより分析した。なお、この質問の回答者総数は136人（2005年45名、2006年53名、2007年38名）であり、性別は男性51名、女性85名と3年間を通じ、女性が男性を上回る状況であった（図1）。応募者全員の平均年齢は62.9歳（男性平均63.3歳、女性平均62.7歳（取り消し者3名（男性1名、女性2名）は不明）。男性の応募者最高年齢者は78歳（参加者最高年齢は74歳）、女性の最高年齢者は83歳、男性の最少年齢者は46歳、女性の最少年齢者は47歳と主に60代が多かったが、幅広い年齢層からの回答を得た。参加者の居住地域は地元である京都府および大阪府が大部分を占めているが、北海道から沖縄県と、幅広い地域からの回答を得た（図2）。

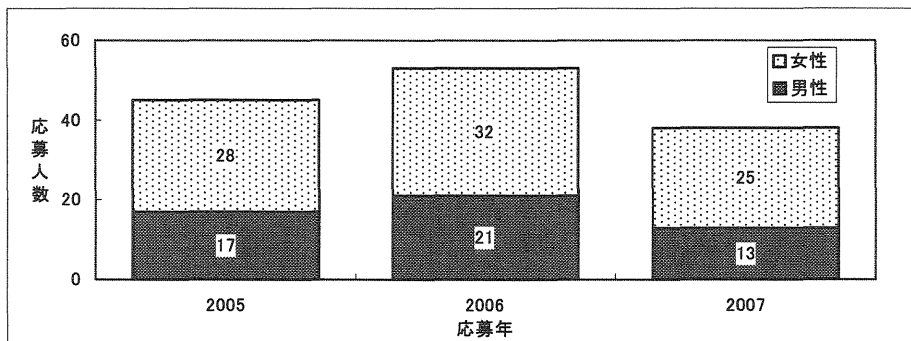


図1 応募理由回答者 性別、参加年度別内訳

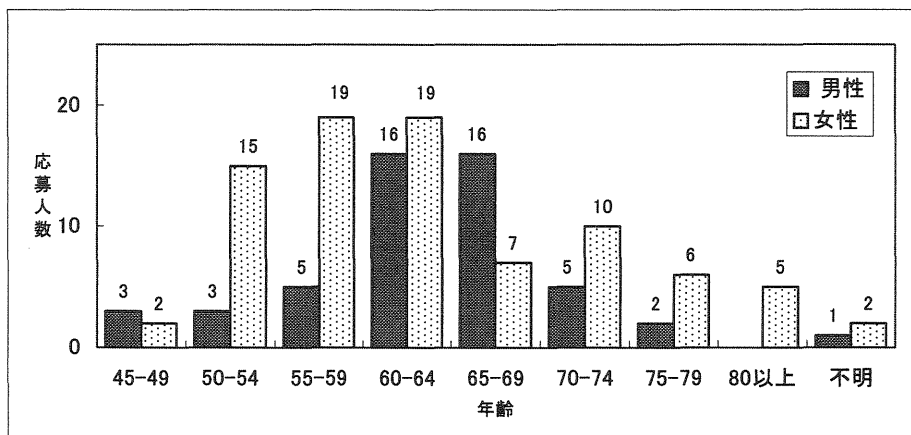


図2 応募理由回答者 性別、年齢別内訳

まず、自由記述文を日本語形態素解析ソフト（Word-MinerVer.1.1）を使用し、分かち書き処理を行った。次に、記号、句読点、助詞（全体）の削除を行い名詞・形容詞・動詞・形容動詞の抽出を行った。その後、代表的な主要意見を抽出するために、10回以上使用された語句を抽出した。その結果、回答者の意識を代表する用語として42件・755語を分析対象とした。

2 応募理由の傾向

応募理由欄に記述されている内容の傾向をつかむため、キーワードを構成要素数順に並べたのが表1である。応募理由であることから、応募対象である「京都大学シニアキャンパス」を連想させる名詞「大学（1位）」「京都（2位）」「シニアキャンパス（10位）」が上位を占め、続いて「京都大学シニアキャンパス」に対する「参加（3位）」「応募（4位）」「興味（8位）」という構成要素が上位を占めている。参加者自身に関係するセンテンスであろうと想像される構成要素は「学習（5位）」「人生（7位）」と続いている。

なお、「大学（1位）」と「京都（2位）」に関しては、これら2キーワードをあわせて「京都大学」として使用しているセンテンスがみられた。そこで、「大学」と「京都」、さらに「京大（19位）」を含む合計76センテンスをあわせ、そのうち重複しているセンテンスを除き、再度「京都大学」と、京都大学以外を意味する「大学」と「京都」の3つに分類した（表2）。その結果、「京都大学」は構成要素数が33となり、順位は「参加」「応募」とならび全体で1位であった。「京都」は構成要素数が11となり、順位は14位であった。「大学」は構成要素数が5となり、順位は再分類前の1位から48位へと大きく後退した。ここから、シニアキャンパスの応募理由には「京都大学」であることが強く影響していると思われる。

さらに、「応募記述キーワード構成要素順」（表1）の「私（10位）」と「自分（13位）」が、同じ内容を意味するかについても分析した。その結果、「私」は「私は○○」というように主語として使用されているが、「自分」は「自分の時間」や「自分の身体」といった使われ方をしており、別のキーワードとして扱われていることがわかった。

平成17年5月に内閣府が行った「生涯学習に関する世論調査」における、「生涯学習」をしている理由をたずねる質問で、40代以降で共通し上位3位回答結果を占めた質問項目には「趣味」「親睦」「友人」「健康」「体力」という言葉が用いられている。しかしながら、シニアキャンパス応募者の応募理由にはこれらの記述されていない。シニアキャンパスのプログラム内容は多彩であり、特に健康に関しては2005年度「シニア時代の健康と身体」、2006年度「高齢者の健康を考える」、2007年度「アルツハイマー病治療薬開発の夢を」「薬の利用と起源」と、プログラムを見るだけでも関連する講義やフィールドが存在するが、応募理由に記述されていないところをみると、一般的な「健康」のイメージとは異なって認識されているのではないかと思われる。加えて「友人」に近い「出会い」がシニアキャンパスでは30位であり、それよりも上位に世論調査では下位結果である学習や学習内容に関連することばが用いられていることは、シニアキャンパス応募者の特徴であると考えられる。

表1 応募記述キーワード構成要素順

順位	構成要素	構成要素数	順位	構成要素	構成要素数	順位	構成要素	構成要素数
1	大学	34	10	私	14	18	自然	9
2	京都	33	10	是非	14	18	人	9
2	参加	33	13	自分	13	23	学生	8
4	応募	21	14	講座	12	23	事	8
5	学習	17	15	機会	11	23	生涯	8
5	今年	17	15	講義	11	23	大変	8
7	人生	16	15	生活	11	23	内容	8
8	興味	15	18	希望	9	23	勉強	8
8	昨年	15	18	京大	9	29	テーマ	7
10	シニアキャンパス	14	18	今	9	29	出会い	7

キーワード(該当数 737/737 件。[総サンプル数] n=136,[有効サンプル数] n=132)

表2 応募記述キーワード「京都大学」「大学」「京都」再分類結果

順位	構成要素	構成要素数	順位	構成要素	構成要素数	順位	構成要素	構成要素数
1	京都大学	33	9	是非	14	18	人	9
1	参加	33	12	自分	13	18	学生	9
1	応募	33	13	講座	12	23	事	8
4	学習	21	14	京都	11	23	生涯	8
5	今年	17	14	機会	11	23	大変	8
6	人生	16	14	講義	11	23	内容	8
7	興味	15	14	生活	11	23	勉強	8
7	去年	15	18	希望	9	23	テーマ	8
9	シニアキャンパス	14	18	今	9	29	出会い	7
9	私	14	18	自然	9	48	大学	5

キーワード(該当数 737/737 件。[総サンプル数] n=136,[有効サンプル数] n=132)

2.1 応募理由キーワード「大学」

一番多く用いられているキーワードは「大学」であり、「大学」を用いたセンテンスは43件あった。このセンテンスを分類すると、大きく5つになった。図3にみられるように、一番多かったのは「子どもが京都大学に在学している」など、子どもや親族といった身近な人物が京都大学(あるいは他大学)に在籍しているから応募したという理由であり、特に女性の50~59歳に多くみられた。次に多かったのは「ヒントが得られれば」「京都大学の図書館で調べてみたい」など、シニアキャンパスを何らかの学習の機会として応募したという理由であり、55歳~64歳の女性と65歳~69歳の男性に多く見られた。一方、女性のみにもみられた応募理由は、「大学の社会人に開放している講演などにも積極的に参加」「各大学の公開講座のパンフレットを取り寄せ、探しておりました」など、他大学の公開講座などにも興味を持っている内容であった。

これらのことから、女性の場合、子どもが大学生位に成長し、ある程度手が離れた時期が参加のきっかけとなっている場合、一部で自分の学びにつなげる傾向もみられるが、その大部分が身近な存在との関連が高い教育機関（子どもの母校）に興味を示す傾向がみられた。それに対して、時期の記述が無い場合は、「講義を受けたい」「自分自身のために、もう一度、勉強を始めたい」といった自主的な学習を求める傾向がみられた。男性の場合、定年前後に「見聞を広げる機会」「後半生を考える契機」や「子供との絆を尚一層強めたい」など様々な角度からではあるが、今後の人生のプラスにつなげる機会としている傾向がみられた。

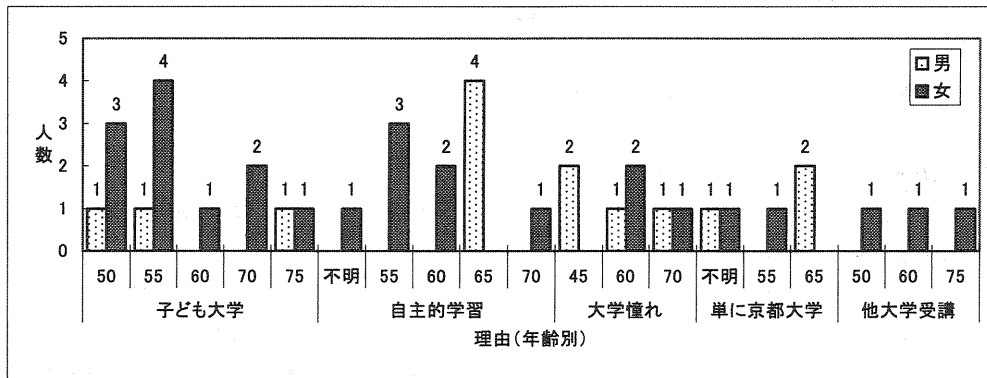


図3 応募記述キーワード「大学」の分類 (n=43)

2.2 応募理由キーワード「京都」

二番目に多く用いられているキーワードは「京都」であり、「京都」を用いたセンテンスは41件あった。このセンテンスは、地名「京都」として用いられているセンテンス（男性10人、女性12人）と、「京都大学」として用いられているセンテンス（男女とも10人）と、その他（3人）の、大きく3つに分類できた。「地名」に関しては、単に地名としてだけではなく、関係が深い土地であることや、歴史的な土地に興味を惹かれることを理由とするセンテンスもみられた。また、「京都大学」に関しては、子どもなどとの関係を示すもの、京都大学に対する憧れ・興味、京都大学での学び、リピーター群に分類することができた。「京都大学」に関しては、別のキーワード「京大」とあわせて後述する。

図4にみられるように、男性は、土地に関する理由よりも、「京都大学」自体を理由とする傾向にあるのに対し、女性は、直接的な「京都大学」を理由とする傾向にあるだけでなく、土地に関する理由をあげる傾向が若干高いことから、間接的な理由をもつ傾向であると考えられる。

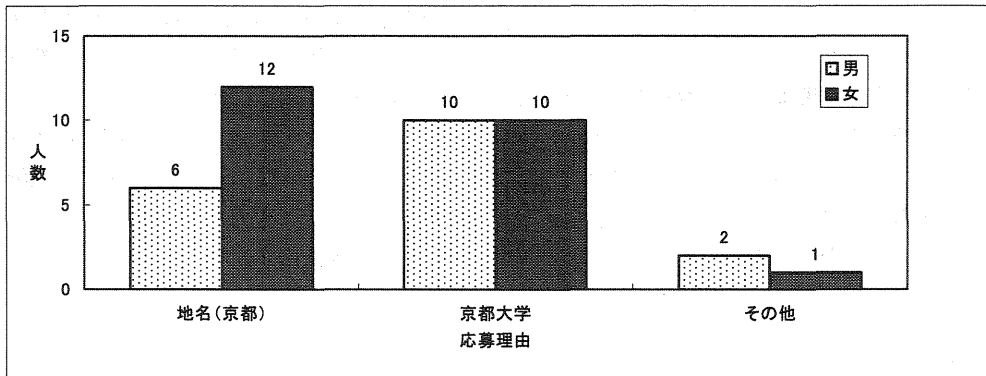


図4 応募記述キーワード「京都」の分類 (n=41)

2.3 応募理由キーワード「京都大学」「京大」

応募理由に「京都大学」を意味する語を用いたセンテンスは、2. 応募理由の傾向で再分類し、重複センテンスを削除した結果、合計33件であった。

このセンテンスを分類すると、大きく6つになった。図5にみられるように、「興味」(9人)と「子ども」(8人)に関する内容が全体の50%を占めている。男女を比較すると、男性は女性に対し「学び」「知識」に多い傾向を示し、女性は男性に対し「興味」「子ども」に多い傾向を示している。この傾向は、男性には受講以前から特定分野に対する知識欲を持つ人や研究者、卒業生をはじめとする人々が存在していることも影響しているであろう。

男女共に多かったのは「子ども」であり、「子どもが京都大学に在学している」など、子どもや親族といった身近な人物が京都大学に在籍しているから応募したという理由であった。全体で一番多かった「興味」は男女で大きく偏りが生じている。女性の中でも「興味」を理由としているのは55歳～59歳代(4人)と、80歳以上(3人)だけであった。多くの理由が「開かれた」京都大学はどのようなものか興味をもったという内容であったが、80代女性(3名中2名)の理由には、「一度は」と長く興味をもち続けていると示唆される言葉が使われていた。また、「憧れ」と答えた4名は男性2名は40代後半であり「京大」に「憧れ」と記述しているのに対し、女性2名は60、70歳代で2人とも「(長年)憧れ」の「京大」と記述している。この理由としては、京都大学文学部に初めて女子が受験したのが1946年であることや、法学部においても定員250～330名に対し、女性の入学許可者数が1949年以降1968年まで二桁にすら達しなかった、当時の彼女達の進学状況の時代背景が関係していると思われる。

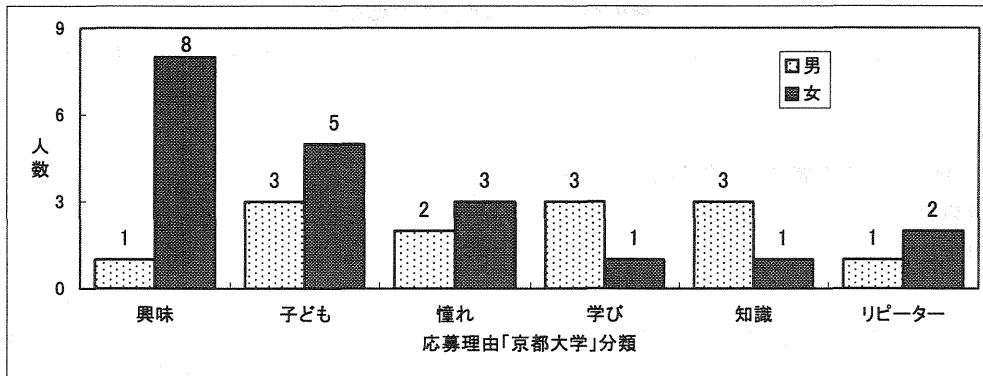


図5 応募記述キーワード「京都大学・京大（合算）」の分類（n=33）

2.4 応募理由キーワード「学習」「学び」「学ぶ」

シニアキャンパス応募者の特徴であると考えられる「学習」を用いたセンテンスは18件あった。加えて「学」で検索し検出された「学ぶ」（12件）と「学び」（33件）を合算した。最初に各項目ごとに32に分類し、次に同じ意味を持つ語をまとめ、大きく11に分類した。

「学習」だけでは「生涯学習」として用いられているセンテンスが約3割を占めていたが、一番多かったのは男女共に「新しいことを学びたい」「もう一度学びたい」など「学習意欲」を述べているものが多かった（図6）。特に女性は「楽しい学習」や「学ぶ喜び」などポジティブな修飾を用いている傾向が高かった。さらに動詞として「学習」や「学ぶ」を使用していること。加えて、プログラム案内文に使われている言葉の利用も、男性は「学びを編みなおす」に共感したなど、それ自体の感想として用いているのに対し、女性は「学びのスタイルを考えてもらう」場に挑みたいなど参加意識として用いていることから、女性のほうが、強い学習参加意識を持っていると思われる。また、年代別でみると、女性の60代前半にその傾向がみられた。

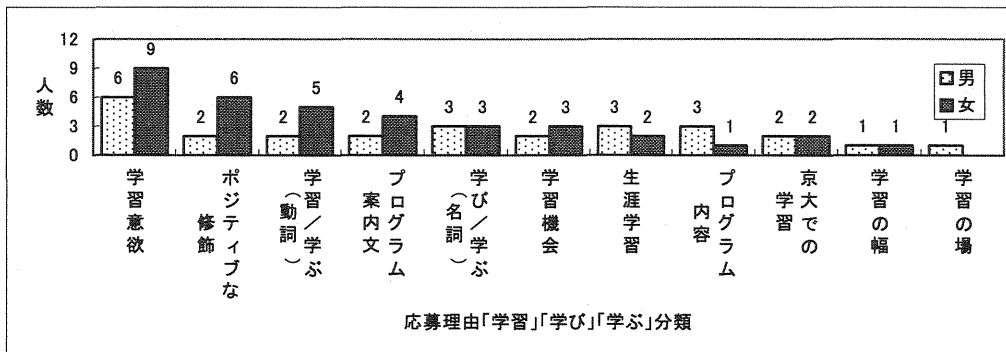


図6 応募記述キーワード「学習・学び・学ぶ（合算）」の分類（n=63）

3 属性からみる応募理由の傾向性

次に、応募理由（自由記述文）と属性（性別）の項目を用いて自由記述文のクロス集計を行った。

3.1 単語（分かち書き）×性別のクロス集計

性別の違いにより出現する単語がどのように異なるか検討するために、単語×性別のクロス集計を実施した。（N=109）

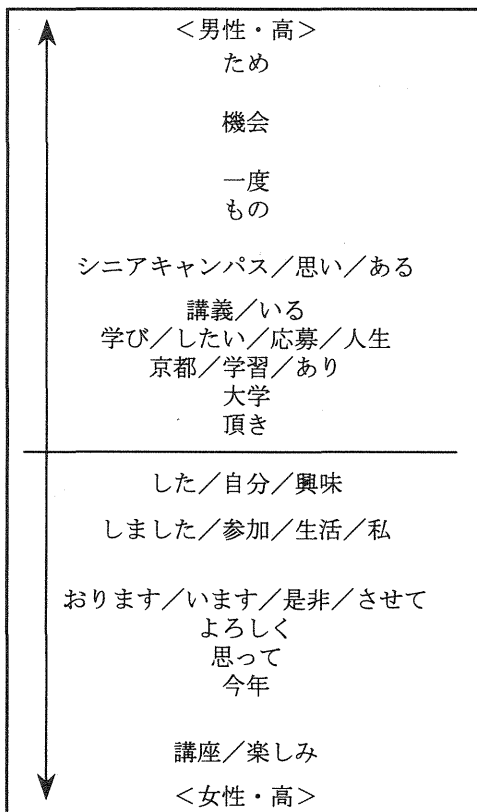


図7 単語×性別のクロス布置図

クロス集計結果を、軸の両端に男女とした布置図で表したところ、最も男性側に位置した単語は「ため」であった。内容を分析すると、主に「学びのため」と「自分のため」に分類でき、全て目的に対して意識的である傾向がみられた。次に男性側に位置した単語は「機会」であり、主にシニアキャンパスを学習の機会としており、明確な名称を掲げて参加する傾向がみられた。その他の傾向として、「シニアキャンパス」「講義」「応募」「京都」とシニアキャンパス自体と直結している理由を挙げている傾向。「したい」「応募」と、参加に対し主体的な傾向が示唆される。

一方、最も女性側に位置した単語は「楽しみ」「講座」であった。「楽しみ」の内容を分析すると、学びを楽しみにするグループと人との出会いを楽しみにするグループの2つに分類できたが、どちらも相手から何かを受けることを「楽しみにしている」としている内容が多く、受身的であり非目的性である傾向がみられた。受身的な傾向は、「よろしく」や「させて」にもみられる。また、「講座」という単語は、パンフレットには書かれていない単語である。「講座」

とかかれたセンテンスには、他機関での公開講座の受講経験を記述しているものが約半数あったことから、他機関の名称の影響を受ける一方、比較し選択していることがうかがえる。加えて、こうした講座への参加は消費することと捉えている傾向があると示唆される。

4 まとめ

以上のことから、シニアキャンパス応募者の応募理由には、全体として、学習を主において参加する姿勢がみられる、他とは異なる特徴があった。また、主に子どもである親族の母校であることを理由とする傾向があることも、シニアキャンパス応募者の特徴的な傾向であると考えられる。

男女別の特徴は、男性は、その多くが定年を機に参加する傾向がみられるためか、主体的に、次の人生の構築も含めた目的意識を持ち、直接的理由をあげて参加する特徴がみられ、女性は、その多くが子どもの成長が一段落したのを機に参加する傾向がみられるためか、それまでの子ども中心の子育てリズムの影響なのか、受身的で、間接的で非目的的な理由をあげる傾向がみられるが、学習に参加する意識は強い特徴がみられた。

（元根 朋美）

4. 応募はがき・感想分析

はじめに

本稿は、2007年9月18日から21日にかけて行われた「京都大学シニアキャンパス2007 交響する身体一ひと・もの・自然が奏でる第三楽章」において実施された募集はがきで受講希望者に記入を求めた「応募理由」と、実施後に受講者によって提出された「感想」を対象に分析するものである。シニアキャンパスを受講する人々がどのような期待や関心、意識をもっているのか、受講者はシニアキャンパスを通してどのようなことを感じ、学んだのか、受講後での変化は何か、という視点から、「応募はがき」と「感想」の分析をし、シニアキャンパス受講者とシニアキャンパスの特性を明らかにしていきたい。

2007年シニアキャンパスには、「応募はがき」での応募が38名からあり、そのうち、受講したのは36名である。そしてシニアキャンパス受講後に「感想」を寄せたのは、16名である。「感想」を寄せた受講生の年齢、性別は次のようになっている。

男性6名、女性10名

50～54歳 1名、54～59歳 2名、60～64歳 5名、65～69歳 3名、70～74歳 4名、75～79歳 1名

本稿では以下のような順序で分析を進めていくこととする。1. 「応募はがき」にみられる受講者の傾向性を示す。2. 1で得られた傾向性を軸として「感想」を分析する。3. 「応募理由」に限定することなく、「感想」をいくつかの視点から分析する。

ただし、本稿で扱う「応募はがき」「感想」はあくまで2007年度シニアキャンパスのものであり、3年間で包括的に考察するものではない。以下で筆者が引用する「応募理由」や「感想」の部分には、受講者のイニシャルを記入することとする。イニシャルが同一の受講者には、その後に性別や年齢を付すこととする。

1 「応募はがき」における「応募理由」の分析

「応募はがき」では所定の欄に「応募理由」の記入を求めており、受講を希望する者全員が「応募理由」を書く。2007年シニアキャンパスにも38名の受講希望者からの「応募理由」が届けられた。本稿は「感想」との分析を目的としているため、38名のなかでも「感想」を寄せた16名の「応募理由」に注目する。そして、ここでの分析を、次の「感想」の分析軸として活用したい。ひとつの「応募理由」のなかに複数の要素がある場合、より強い要素を選ぶのではなく、ここでは、どちらも分析の対象の要素として扱いたい。したがって、引用されるある一人の「応募理由」を重複して用いる場合がある。

まず、「応募理由」からわかることは、多くの受講者が、シニアキャンパスを自分の学びのきっかけや、学びを広げるための足がかりとしてとらえている点である。それは以下の「応募理由」にみられる。

「学び」を再構築するきっかけとしたい。(H・Tさん)

京都大学シニアキャンパス（2005～2007年）実施報告

公開講座に参加し少し自分のテーマが見えてきたような気がしますが、未だ具体性はありません。貴大学の講座に参加させていただきヒントが得られれば（M・Mさん）
一度、是非参加して学習のキッカケをつかみたかった。（R・Oさん、男性）
生涯学習の第一弾として、当イベントを選択した。（R・Sさん）
更に学びの幅を広げたい。（T・Mさん、70歳）
今後色んな事を学習しようと計画しています。（K・Iさん）
今後の人生においてどの様に生きていけばよいか参考にしたい。（M・Kさん）

このように、シニアキャンパスへの参加前の段階で、学習への関心が高いだけでなく、シニアキャンパスを通して、その後の学びを展望しようとしている。

次に、「応募理由」のなかで多かったのは人との出会いや再会、関わりを求める声である。特に、2年目、3年目となるリピーターの間では、シニアキャンパスに同期との「再会」を求める声が強い。16名のうち、「出会い」や「再会」といった言葉をもちいたのは6名で、うちリピーターは4名である。

良き出会いを期待しています。（R・Sさん）
連続し受講、今年はどんな学習し、発見・出会いが出来るか楽しみ。（R・Oさん、女性）
第1回、第2回ともに参加させて頂き…色々な方との出会い、再会、そこでも学ばせて頂きました。（T・Oさん）
又昨年ご一緒した方達との再会を楽しみに伺いたいと思います。（T・Sさん）
共に学ぶ喜びと、新しい出会いに期待して申し込むことにしました。（Y・Hさん）
種々の分野の方々の道理や人と人との関わり・真理をもう一度自分なりに見聞したく応募しました。（T・Mさん、53歳）

リピーターは16名のうち、7名であり、半数近い割合を占める。7名のリピーターのうち6名が前回参加したことを次のように「応募理由」のなかで述べている。

昨年度参加させていただき、大変興味深く、収穫が多かったので（H・Oさん）
夫婦で昨年も参加させて頂き大変嬉しくこのご通知を心待ちに致しておりました。（Y・Yさん）
今年で3回目を希望いたします。（K・Mさん）
昨年初めて参加。極めて印象的。（T・Mさん、70歳）

また、「応募理由」のなかでシニアキャンパスのテーマや、具体的な内容を挙げていたのは4名だった。

（1）「ひと・もの・自然が奏でる第三楽章」というテーマ （2）上記からくと思わ

れるカリキュラムの多様さにひかれました (M・Yさん)

「経済学でものを考える」と講義2 (「アルツハイマー病治療薬の開発の夢を追って」…引用者) がぜひに受けたく思いました (K・Mさん)

年に2～3回の癌治療を受けながら、今年は薬にも興味を持って受講させて頂きたい (T・Oさん)

また全盲の方々と接する機会が度々あり、現在リタイア盲導犬を飼っています。「目の見えない人と楽しむ美術鑑賞」にも大変興味があります (T・Mさん、53歳)

以上のような「応募理由」の傾向性から、以下に行う「感想」の分析の軸を得たい。それは、①シニアの学びとシニアキャンパス、②人との出会い・再会、③リピーターとシニアキャンパス、④テーマ・内容への関心の4点である。

2 「応募理由」と「感想」にみられる受講生の傾向

ここでは、「応募理由」からえられた受講生の傾向を軸として、「感想」をみていく。とりわけ、「応募理由」を記入した受講前と、受講後ではどのような変化があったかを明らかにしたい。

2.1 シニアの学びとシニアキャンパス

1でみたように、シニアキャンパスを今後の学習を広げていくきっかけしたいという期待をもった受講者は、「応募はがき」において多くみられた。そして、このような期待をもった受講者からは以下のような感想が寄せられた。

私自身この「シニアキャンパス」を「第三楽章」のキックオフとして、「大いなる者」へより近づけるようマイペースで人生を消化して行こうと思っています。(H・Tさん)

家を離れ見知らぬ人々の中で過ごす4しばし日間は暫し現実を忘れ開放された自由な気分になりました。もしこれが地元で自宅から通っていたらこれほど集中し五感を総動員し学ぶことは無かったと思います。(M・Mさん)

今とこれからの学びと通して、その思考と行動の原理原則を何処におくべきか。しっかりした価値観を見出して、自分のコスモロジーを求めたいと思います。そのためには、もっと多元的にものを視察し、本質を見極める思考法を身につけたいと思います。(R・Oさん、男性)

この様な体験をいかに、これから残された人生の中で生かしつつ、より豊かな生き方につないでいけるかは、我々受講生に投げ掛けられた課題であろう。(R・Sさん)

これからは焦らずのんびりと周囲の流れを見ながらマイペースで走り続けたいと思います…講義も不消化のところが多々ありますので、思い返しもう一度勉強し直します…年令に関係なく「学ぶ」という事が如何に大切であるかを再確認させられています。(M・Kさん) 年齢に関係なく学習意欲に溢れていて 良い刺激になりました…科目等履修生か、聴講生として講義に付いていけるように自習するつもりです。(K・Iさん)

シニアキャンパスを通して自らの学びを広げようとする受講者の特徴は、ここに引用したものに限らず、多くの受講者の中にみられる傾向であるが、とりわけ、「応募はがき」の時点ですでに学びへの高い意欲を示している受講者にはより明確にあらわれている。シニアキャンパスを、今後の学びへとつなげていく刺激や足場として位置づけ、自らが主体となってこれから学び続けていくことについて深く掘り下げようとしている。

2.2 人との出会い・再会

次に、人との出会い、再会、関わりといった点をシニアキャンパスに期待した受講者は、どのような感想をもったのだろうか。シニアキャンパスがフォーマルなプログラム以外に受講者に対して何を提供できたのかを考える手がかりを得ていきたい。以下は、「応募理由」としてこのような点を挙げた受講者の「感想」からの引用である。

自分の意思で自分の道を選択し、安易な生き方をしていない（R・Sさん）

受講中、毎日感動の連続だった事、宝物を得たような豊かな心、何より関係の方々に感謝の念でいっぱいです…貴重な体験を日常生活に生かし学び続けたいと思います。（R・Oさん、女性）

北海道から九州迄集まった仲間達とはすぐに打解け講義以外のおまけまで…出たきり老人は、出会った人達に学ばせて頂いた事、感動した事を喋りまわり、その半分の声は自分の耳に入れて反芻しております。（T・Oさん）

学びと共に先生やクラスメートとの出会い・触れ合いは楽しく、京都での四日間は家庭を忘れ自分だけの自由な時間は、学生時代に戻った気分です。幸せ一杯でした。（T・Sさん）

広範囲の人の目にふれる募集に期待したい。（Y・Hさん）

民宿では、…夕食は一間に集まってビールも飲みながら全員の声を聞くことが出来ました。教育問題・介護問題・環境問題・報道の問題・医療の問題を取り上げて話をする事が出来ました。（T・Mさん、53歳）

以上の感想から見えてくるように、シニアキャンパスが人と人の出会いを提供し、受講者が受講者同士の、また教員やスタッフとの交流の場となることを通して、学びの場がうまれている。シニアキャンパスで、講義やフィールド学習がメインのプログラムではある。しかし、それ以外にも形式にとらわれない交流の場が、学びへの意欲を互いに刺激し、促進するために重要な役割を果たしているといえるだろう。

2.3 リピーターとシニアキャンパス

統計上でも明らかにされているように、シニアキャンパスの受講者にはリピーターが多い。2007年シニアキャンパスには、3年目になる「常連」も多く参加した。リピーターは「応募理由」からわかるように、シニアキャンパスに連続して参加すること自体が参加動機となってい

る。2年、3年目と回を重ねることを通して受講者は、シニアキャンパスから何を得ているのだろうか。以下は、「応募はがき」において、再び参加することを理由として挙げた受講者の「感想」からの引用である。

受講生一人ひとりが、夫々の道で社会を歩んでこられた人生の経験者であることを思うと、その学びへの態度エネルギーに改めて敬服した。(H・Oさん)

シニア故の哀しみを体験した方もあり、伴侶を亡くされた複数の受講生たち…でも知的好奇心にうながされてやって来ました、事情を語る時一瞬の涙目、しかし、すぐに「花山のレンズから出た太陽を観てうれしかったです」と晴れやかな声(T・Mさん、70歳)

シニアだからこそそれぞれの経験の重みがあり、空論ではなく決められたテーマに沿った内容の制限もない自発的であり自由な会話であり意義深いものであった。(Y・Yさん)

このように、リピーターは「シニア」についての理解が深く、シニアだからこそつ経験の豊富さ、学びへの姿勢を積極的に評価しようとしている。そして、シニアであるからがゆえに自発性や自律性を学びのなかに認めようとする。このような、受講者自身によるシニアへの理解や価値づけがシニアキャンパスの独自性をなしているのではないだろうか。

2.4 テーマや内容への関心

「応募はがき」において、テーマや具体的なプログラムの内容を「応募理由」として挙げた受講者もいた。シニアキャンパスが提供する実質的な「中身」に期待の高かった受講者にとって、シニアキャンパスは何を提供できたのだろうか。これは、今後のシニアを対象とするプログラムを検討していく際に重要な問いとなると考えられる。

まず、テーマに関心をもったM・Yさんは次のような感想を寄せている。

今まで経験したどの学びよりユニークで私にとって実り多いものだった…五感をフルに使って、身体全体で、経験を振り返りつつゆっくりマイペースで理解するというより身につけるといった感覚の学びである…このことは、今後の自身の学びに生かしたいし、周囲へも伝えたいと考えている…内容豊富なカリキュラムを組み立て、それを受講者に溶融と開放感をもって与えていけることのすばらしさである。これは京都大学が歴史、知の集積度、自由でフラットな文化、ホスピタリティーなど種々の面で高いポテンシャルを有していることの結果

また、具体的な内容への期待を「応募理由」として挙げた受講者は以下のような感想を寄せた。

4年前に癌の告知を受け、術後余命一年と宣告され、以後5回治療。自分の癌に関しては頑張れると思っていますが、脳が壊れたらと不安。…薬学はどの分野にも日進月歩してい

ますが、人として感謝の気持、やさしい心が大切だと締めくくられたことに感銘を受けました。（T・Oさん）

今回のサロントークを聞かせていただきもう少し多くの事を的確にその盲人の友人に伝える事が出来るようになればとの思いがありましたが、その内容は全く意に反するものでした。「盲人との交わりから教えられるものがたくさんあるのですよ。」と云わんばかりのものでした。五感を全てフルに使って感じる事の難しさや奸悪を言葉で表現する事の多様性を思い知らされるものでした…（盲人の方々は…引用者）生き生きと私よりも広範囲に活動され、しかも視覚以外の四感を私達以上に活用されています。（T・Mさん、53歳）

このように、具体的な内容を「応募理由」で挙げた受講者はこれまでの生活のなかで自分自身が経験してきたこととの関連で、高い関心をもったということができるだろう。それだけに切実な思いをもってプログラムに臨んでいるし、期待していたものとは異なる考えが提示されたときには明確な違和感をもつといえる。

3 「感想」の分析

ここでは、受講者がシニアキャンパス後に寄せた「感想」をいくつかの軸を設けて分析し、シニアキャンパス受講者についての理解を深めるための示唆を得ていきたい。「感想」は形式自由で、内容もそれぞれが自由に考えたものである。したがって、枚数や感想として書く内容、言及されたプログラムなどについて、かなりの個人差がある。また、「感想」を寄せなかった受講者もたくさんいることから、ここでの「感想」分析にはある程度の偏りがあることはまねがれない。

しかし、受講者自身が文章化した「感想」からは、アンケートや統計的なデータからはみることのできない一面をみることができないのではないかと考える。以下では、①シニアキャンパス以前の経験、学習、②シニアキャンパスのテーマへの共感、③フィールド学習でのシニアの学び、④具体的プログラムにおけるシニアの学び、⑤シニアキャンパス継続の声、という視点から、「感想」を分析する。

3.1 シニアキャンパス以前の経験、学習

受講者のなかには退職した人が多く、「退職」や「リタイア」をきっかけとしてシニアキャンパスに関心をもった場合が少なくない。したがって、それまでの学習経験として、次の感想にみられるように仕事に関するものがある。「現役時代は、仕事に関連する領域の知識やスキルの習得に終始した…仕事に直接関連しない分野の学びをする余裕が無かったのである…（定年後に…引用者）放送大学に入学し…現在も修士選科生として在学中である…講演会聴講や博物館見学にもしばしば出かける」（M・Yさん）

また、女性の受講者で主婦としての生活を送ってきたと思われるK・Mさんは、「家庭に入ってから、学びということは書道と華道を生涯学習とする以外何もなく…現在、子供と大人の教室を持っていますが、今、教育や家庭生活にとっても多くの疑問を持っています」と述べてい

る。シニアキャンパスには、「子供達もそれぞれ独立し、家庭を持ち両親も見送り自分自身、自由な時間がとれるように」なったことから、参加を決めたという。

現役の外科医として活躍しつつ、シニアキャンパスに参加したT・Mさん（53歳）は、外科医として働いてきた経験から、特に医療問題、介護問題について掘り下げたレポートを寄せた。そこでは、「少し興味本位のところもありましたが、人生においてこのような体験はなかなかできないだろうからとの思いと、もう一つは、日本各地から集まってこられた、そしていろいろな人生を歩んでこられた恐らくは私よりも年配であろう方たちと人生について、社会について特に私の仕事である医療問題について率直な意見が交わせたらとの思い」と書かれていた。

これらの感想から、受講者のこれまでの経験や、現在進行形で従事している仕事や、参加へ至る動機へと影響していることがわかる。

3.2 シニアキャンパスのテーマへの共感

受講者からの感想から、2007年シニアキャンパスのテーマである「交響する身体—ひと・もの・自然が奏でる第三楽章」への共感性が高いことがわかる。テーマで用いられている言葉は、受講者個人によって使われ方は異なるものの、多くの受講者の思いを表現するのを助けているといえる。テーマに関係する表現には、たとえば以下のようなものがある。

京大ならではの講義やフィールド学習だけでなく、先生方、スタッフの方々を事務局長との身近なトーク、更には 受講生同士の議論や会話が絶妙にミックスされ心地よいハーモニーを経験できました…私自身この「シニアキャンパス」を「第三楽章」のキックオフとして…（H・Tさん）

五感をフルに使って、身体全体で、経験を振り返りつつゆっくりマイペースで理解するというより身につけるといった感覚の学びである。（M・Yさん）

「交響する身体・ひと・もの・自然を考える」と出会いそのテーマが、文学的・音楽的・哲学的と一人一人がどの様にも理解でき、また現代人の忘れかけている最も大切な心であると感じ参加いたしました。（T・Sさん）

五感を研ぎ澄まし柔軟なものの見方、考え方が出来るようでありたいと思いながら…（T・Hさん）

「第三楽章」という言葉はシニアである受講者の人生の「第三期」と重なるイメージをもっているといえる。また、シニアキャンパスでの学びが、身体性と結びついていること、そして、「ひと・もの・自然」というテーマのもつ多様性が、受講者の共感と呼んでいるといえるだろう。

3.3 フィールド学習でのシニアの学び

フィールド学習は、参加者から高い期待と評価を受ける、シニアキャンパスのプログラムのなかでもメインともいえるものである。現地で受講者自身が体験することができるフィールド

学習についての感想では、以下に示すように、「五感」や「開放感」といった「感覚」を表す言葉が用いられている。

参加者には自由や開放感が与えられること、最先端の研究成果の講義から、五感を駆使して遊んでいるのではないかとさえ感じられる楽しいフィールド学習まで相反する感覚に浸りながらの4日間であった…日本酒の製造工程をつぶさに見、麴に触れ、嗅ぎ、かじり、醪を飲みと五感をフルに使っての見学をさせていただいた。このように楽しい学びの方法があるのだとしきりに思った。(M・Yさん)

現地学習との組み合わせで、現場での学習の大切さを知り大へん幸せだったと思います…単に現象を自分で考えるだけでなく、それを広く現場に出て五感で学ぶということは何にもまして強い武器になると思いました。(R・Oさん、男性)

一介のサラリーマンとして日夜悪戦苦闘してきた身として、すっかり忘れてしまっていた、人間生きていくうえで一番大切なものは何か (R・Sさん)

えもいわれぬ心の癒し空間に接し得た一日でもあった…時間との関連もあろうが、「藁靴」「ふご」なども作ってみたかった。(H・Oさん)

受講者が実際に見、体験し、触れることを通して学ぶことへの楽しさ、嬉しさが感想から伝わってくる。フィールド学習は選択制になっているために、感想のなかには「全コースに参加できないことが、多少、残念に思いました」(R・Oさん、男性)、「選択肢が増えて全て興味深く大変迷いながらの選択でした」(T・Sさん) という声もあった。

3.4 具体的プログラムにおけるシニアの学び

感想の形式は自由であるために、書き方は各受講者によって異なるものの、特定のプログラムについて触れている場合が見受けられる。ここでは、①オープニング講義、②学びを語りあう夕べ、③ゼミナール、④特別最終講義、⑤見どころツアーに特に注目したい。なぜなら、これらのプログラムは、多くの受講者が感想で触れていることに加えて、シニアキャンパスの特色を示すものとみることができるからである。以下では、5つのプログラムに関して寄せられた感想を引用する。

① オープニング講義「五感を研ぎ澄ます―生涯を通じて学ぶこと―」

「皆さんの生きてきたことを尊重する。すべてのことに対して強制はしない。進むも止まるもご自由です。」…こんな自由度のある開放的な学び方があるということを知り、五感を覚ませ！生かせ！そうして得られた知識こそが真の知であるということを受得 (M・Yさん)

学びの種類として「五感を研ぎ澄ませて学ぶ」ことは、脳に大きな刺激となって活性化されるのだと、新ためて学ばせてもらうことが出来ました。やはり思った通りの学習だった (R・Oさん、男性)

「熟年の人たちの経験は宝の山」…受講者仲間で語り合うとその通り、フィールドワークを地で行く学びと意欲を生み出す (T・Mさん、70歳)

② 学びを語りあうタベ

自分以外の受講者は、どのような学びをし、感想を抱いているのであろうかということが気になりだしたところであったので、非常にいいタイミング…それぞれの関心にしたがって、各カリキュラムが考えを深める契機になったり、ヒントを与えられたり、何よりも皆楽しんでいることがわかった (M・Yさん)

③ ゼミナール「学びを分かち合う」

学びに対する個々の姿勢にお互いが刺激され、さらに触れ合い響き合うことが出来たように感じました…自分の視野が少しではありますが広がったように思われるのです。(T・Mさん、53歳)

先生の「体験・経験を多く持っていることが次のアプローチを豊かにする。」とのお言葉が印象に残る (M・Yさん)

このような体験をいかに、これから残された人生の中で生かしつつ、より豊かな生き方につないでいけるかは、我々受講生に投げ掛けられた課題であろう (R・Sさん)

④ 特別最終講義「歳を重ねる喜びと悲しみ一心の第三楽章一」

「生きることは死とのバランスの上に成り立っている。」というくだりは大変興味深く拝聴しました。(T・Mさん、53歳)

「嫉妬と羨望」をいかに「感謝と報恩」に変換できるか、私自身この「シニアキャンパス」を「第三楽章」のキックオフとして、「大いなる者」へより近づけるようマイペースで人生を消化して行こうと思っています。(H・Tさん)

新しい体験を新しい感覚につなぎつつ、感謝と報恩への転換のできる老年を送りたいものと強く思う。(M・Yさん)

⑤ 見どころツアー

ガイド役の学生さんがこの日の為に一生懸命下調べをされた事を熱心に説明して下さいました…和気あいあいで楽しいひと時だった。(Y・Hさん)

これらの感想からわかるように、シニアキャンパスは、単に「シニア」に対して大学のもつ知識、研究の現場「体験」を提供しているわけではない。受講者は、第三期を生きる「シニア」として次の学びへとつなげようとしているといえるだろう。そのような学びを支援するものとしてここで取り上げたような、シニアキャンパス独自のプログラムの意義は大きいのではないだろうか。

3.5 シニアキャンパス継続の声

シニアキャンパスの来年度以降の継続を望む声は多い。感想のなかで継続を希望を表したのは16名のうち、13名にのぼる。

おそらく日本一ユニークなシニアキャンパスを来年以降も（M・Yさん）

明確に「シニア」と謳ったこの催しはとても意義のあるものだと思います（M・Mさん）

満足度はかなりのものがありました。先生方の負担感は、我々の想像以上のものがあつたかと推察致します。しかし、将来の社会構造の変化を考えても、このような企画が定着していくことはある意味に於いては必然であろうと思います…当企画の真の目的を将来に生かして頂きたく（R・Sさん）

第四、第五…という楽章が継続されますことを願って…旅などに関連した国内、外の歴史、地理、政治などの企画も提案いたします。（K・Mさん）

「第三楽章」は必ず第四楽章へ…「継続は力なり」を語り初める時期が近づいている…総体的なプログラムは従来のものでOK、京大ブランドにさせましょう…（受講生が歩んできた…引用者）歴史を語り話し合う時間も面白い…裁判制度を語る法学部や古典解読の文学部など文系も（T・Mさん、70歳）

マンネリを防ぐ企画と広範囲の人の目にふれる募集に期待したい。（Y・Hさん）

このように、シニアキャンパスのテーマである「第三楽章」とイメージを重ねながら、継続を要望する感想を記している。全体的な枠組みへの変化を求めないものの、多様性に富み、シニアの関心をひきつけるようなプログラムを求めているといえるだろう。

おわりに

本稿は、2007年シニアキャンパスで用いられた実施前の「応募はがき」における「応募理由」と実施後に受講者が寄せた「感想」を手がかりに、シニアキャンパスについて、そして受講者についての理解を深め、それらの特性を明らかにしようとしたものである。筆者は、受講者自身が文章にして表現したこれらの資料から、アンケートや統計はみえてこないシニアキャンパスの、そして「シニア」たちの姿に光を当てようとした。感想は16名からと全体の受講者の半数ほどの数しかない。しかし、受講者が何を学び、何を感じ、シニアキャンパスは受講生にとって何であったのかといった問いに迫れるような貴重な資料であるとする。筆者の力では、受講者の思いや考えを十分に引き出すことのできなかつたかもしれないが、受講者が言葉を選びつつ書いた感想は、読み手を力づけるようなものだった。筆者自身の「感想」からすると、シニアキャンパスとは、受講生が自分のなかで完結させてしまう「体験」でもなく、その場で終わってしまうような「企画」でもなく、シニアキャンパスで学んだこと、起こったこと、体験したことを、それにかかわる人々との共有へとつないでいく、「身体」が喜ぶような学びの場となるものなのではないだろうか。（柴原 真知子）

5. 新聞報道について

はじめに

京都大学大学院教育学研究科生涯教育学講座（前平泰志教授）が、旅行社JTBからの委託研究として「高齢期の社会・文化活動に関する研究」を開始したのは2004年2月のことである。早くも同年3月末には、委託研究費を活用した共同研究活動の一環としてプレシニアキャンパスが企画され、従来の中高年を対象とした大学教養講座とは一線を画す「キャンパスライフ体験ツアー」（2月5日付 読売）として実施された。このプレキャンパスが、高齢期の新しい学びの形を求めて参加した中高年世代に、共感をもって迎え入れられたことを受けて、京都大学の全学的な取り組みとしての「京都大学シニアキャンパス」（以下「シニアキャンパス」）が構想され、京都大学シニアキャンパス実施検討委員会が発足することになる。翌2005年にはその審議を経て「シニアキャンパス」が具体化され、現在全国で活発な展開をみせる、中高年を対象とした滞在参加型の大学開放事業の原型とも言える企画が創出され、今日に至っている。

その間多くの報道機関が、この京都大学独自のノウハウによる「シニアキャンパス」を紹介しているが、本稿では、その新聞報道に焦点化することで、京都大学の大学開放事業に対する活字メディアの関心と、その論調の一端を分析することにした。

1 「シニアキャンパス」に関わる新聞報道

「シニアキャンパス」に関するこれまでの新聞報道は、教育学研究科とJTBとの「共同研究」と、それを具体化するために取り組まれたプレシニアキャンパスを紹介した第1期（2004年）、京都大学の全学組織を立ち上げて取り組まれた「シニアキャンパス 2005」を伝える第2期、2005年のノウハウをもとに、京都大学の研究組織との連携をさらに深め、参加者の生涯学習的なニーズに応える継続事業として取り組まれた「同 2006」および「同2007」に取材した第3期に大別することができる。

以下この分類に沿う形でこれまでの新聞記事の概要を示す一覧表を作成した。

年度	日付	新聞名	版（頁）	語数	見出し（数字は見出し数を示す）	掲載写真
2004	2.5	読売(夕刊)	大阪 (1)	672	① 京大 共同研究 JTB ② 中高年の生涯学習 ③ 3月にキャンパスツアー	
	〃	京都(夕刊)	本社 (10)	259	京大 JTBと生涯学習研究	
	〃	日経(夕刊)	大阪 (15)	355	① シニア世代に学生生活体験 ② 京大、JTB委託で講座	
	2.6	朝日(朝刊)	大阪 (30)	487	① 京大とJTBが共同研究 ② シニア対象講座 ③ 大学生生活体験も	
	〃	毎日(朝刊)	大阪 (2)	448	京大 中高年の「学び」共同研究	

京都大学シニアキャンパス（2005～2007年）実施報告

年度	日付	新聞名	版（頁）	語数	見出し（数字は見出し数を示す）	掲載写真
2004	2.6	日刊工業	本紙（28）	408	① 生涯学習のあり方探る ② 京大 JTBと共同研究	
	〃	中国(夕刊)	本紙（2）	340	① 京大生の気分体験 ② 中高年向け「学内ツアー」 ③ JTBと大学計画	
	〃	徳島(夕刊)	本紙（6）	340	① 中高年対象に学内体験ツアー ② 京大がJTBと企画	
	2.10	大阪日日	本紙（9）	324	① "京大生"になりませんか？ ② 生涯教育の在り方探る ③ 50歳以上を対象にツアー	
	3.16	京都(夕刊)	本社（1）	1022	(連載タイトル) 千客万来 みやこの戦略 学習意欲盛ん ゆとり世代狙う	観光客 (妙心寺)
	3.27	京都(朝刊)	本社（29）	287	① 中高年が京大生体験 ② シニアキャンパス開講 ③ 講義受講、学食も	参加者の 受講風景
	〃	読売(朝刊)	大阪（33）	379	シニアキャンパス京大でスタート	辻本教授 講義風景
	4.10	トラベルニ ュース	本紙（2）	892	① シニアキャンパス実施 ② JTBと京都大学 ③ 生涯学習の方向性さぐる	JTB担当 者の挨拶 風景
2005	8.1	北海道 (朝刊)	全道（10）	341	京都大、教養講座の参加者募集	
	9.27	京都 (電子版)	9.28 本社 (朝刊 29)	219	① 「シニアキャンパス」始まる ② 京都大 尾池総長が講演	尾池総長 講義風景
	9.28	読売(朝刊)	大阪（34）	330	あこがれの京大でシニア37人学ぶ 講座開講	尾池総長 講義風景
	10.10	産経(朝刊)	大阪（3）	1020	① 大学を救うか、中高年の「知力」 ② 京大37人キャンパスライフ楽しむ	フィールド ワーク (京町屋)
2006	6.29	日経(夕刊)	大阪（19）	2087	① 大学に入り直すシニア ② 学問の世界に年齢制限なし (表)シニア層を集める主な大学	
	7.21	中日(朝刊)	本社（29）	171	京大がシニアキャンパス	
	8.3	産経(朝刊)	大阪（23）	709	① 中高年 本格講義や野外学習 ② 中学生 えりすぐり28ゼミ用意 ③ 大学体験参加募る	

年度	日付	新聞名	版 (頁)	語数	見出し (数字は見出し数を示す)	掲載写真
2006	8.4	京都(朝刊)	本紙 (27)	633	① 老いも若きも来たれ京大へ ② 中学生に研究紹介 シニアと学びの交流 ③ 来月オープンキャンパス	
	8.22	読売(朝刊)	大阪 (27)	523	① 京大、中高年者に特別授業 ② 来月「交響する身体」テーマ	
	8.23	毎日(朝刊)	大阪 (26)	404	① 京大シニアキャンパス ② 来月19～22日 教授らが講義 ③ 受講生募集	
	11.6	文教速報	第6951号 (11)	830	京大、シニア・ジュニアキャンパスが好評	

2 第1期報道(2004年)の特徴

2004年報道の特徴は、2月5日の京都大学とJTBとの共同記者発表にもとづいて記事作成が行われている点でも明らかのように、中高年の生涯学習をテーマにした「共同研究」が、国立大学法人化を目前にした京都大学と大手旅行社JTBによってなされることに焦点化し、その研究事業の一環としてシニアキャンパスの実施要項が発表されていることである。これは同シニアキャンパスが、全学的な取り組みの魁けとなる「プレキャンパス」であったことと関係するが、この点については後述する。

2月5日の発表は、読売新聞が大阪本社版夕刊の1面トップ記事で報道して大きな注目を集めた。京都新聞も同日夕刊で報じる一方、京都観光の領域に中高年層を捉えた連載コラム記事(3月16日付)でも紹介した。論調となる見出しの立て方では、読売、朝日(2月6日)、毎日(同)、日刊工業(同)は「共同研究」に注目し、京都、日経2月5日、中国(同6日)、徳島(同)、大阪日日(10日)は「キャンパス体験ツアー」に焦点を当てた構成になっている。

これを記事内容で見ると、同じ「共同研究」の報道でもさまざまな異同が見られる。教育学研究科生涯教育学講座によるJTBからの受託研究であることを報じたのは読売、朝日と京都(3月27日)、その研究テーマ名が「高齢期の社会・文化活動に関する研究」であると伝えたのは朝日、徳島、中国、大阪日日である。

研究のねらいについては、「産学連携で、新たな社会貢献のあり方の検討材料にする」京都大学側の位置づけと、「旅行だけでは満足できない顧客のニーズを多角的に研究したい」JTBカルチャーサロンの思惑とを併記する朝日の解説が代表的なものである。研究委託を行ったJTB側のねらいに触れて、読売は担当者の言葉を引用する形で「社会教育であるカルチャーサロンの充実」、毎日と日刊工業は「カルチャーサロンの同業他社との差別化」と補足した。業界紙のトラベルニュース(4月10日)は「今後の事業拡大を図るためには、生涯学習の方向性を定めることが必要と判断。地域に開かれた大学づくりを目指す京都大学と思惑が一致し、共同研究をスタートさせた」と分析した。

研究対象の「高齢期」に関する表記は各社ごとに分かれ、この対象領域を表現する語彙が定

まっていなかった状況を示している。読売、徳島、中国、大阪日日の「中高年」、京都の「高齢者」、朝日、日経、日刊工業の「シニア世代」、毎日の「中高年者」などである。対象属性を示す語彙に関しても、使用された文脈の違いにもよるが「より専門的な講義を望んでいる」（読売）、「知的関心の旺盛な」（京都）、「学習意欲のある」（朝日）、「社会参加意欲をもつ」（毎日）などと分かれた。

3月26日から3日間実施されたプレキャンパスの模様を直接取材した記事は3月27日付の京都と読売に掲載された。読売によれば「約330件の申し込みがあり、京都や大阪、東京など7都道府県の50～84歳の33人が参加」とあり、初日の辻本雅史教授（教育史）の講義「江戸から見た京都大学」での受講生の様子は両社が写真入りで報じた。

3 第2期報道（2005年）の特徴

教育学研究科生涯教育学講座（産学連携研究係）が受託研究の一環として実施運営を行ったプレキャンパスのノウハウは「京都大学シニアキャンパス実施検討会」に発展的に継承され、2005年には京都大学の全研究科をはじめ、総合博物館、フィールド科学研究教育センター、学生部、総務部、研究・国際部が組織的に取り組む全学プログラム「京都大学シニアキャンパス」として実施されることになる。

この間の経過を直接跡づけた報道はないが、シニア世代を対象とする京都大学の大学開放事業が、その研究組織・関係部局との連携をどのように具体化したのかは、9月27日付京都（電子版）と同28日付読売で知ることができる。両記事に特徴的であるのは、初日に企画された尾池総長の記念講義の様子を写真入りで報道し、「シニアキャンパス」の全学事業的展開を捉えていることである。京都は記念講義のテーマ「地震を知って震災に備える」に触れて地震学者としての総長の横顔も紹介した。読売は「国立大が昨年4月に法人化したのをきっかけに、社会貢献の一環として取り組んでいる」と前置きした上で「北海道から宮崎県まで10都道府県の49～76歳の37人が参加、尾池和夫学長ら一線の教授による講義を聞き入った」と伝えている。

参加者の全国的な広がりに関しては、地方紙による大学情報の提供がきっかけになっている場合があることも見逃せないポイントである。8月2日付北海道新聞はで「シニアキャンパス」の参加者募集情報を教育欄の「短信」で紹介しているが、この記事を読んだことが申し込みにつながったという参加者の証言がある。

同記事によってもほぼ確認することができるのは、「シニアキャンパス 2005」における ① 3泊4日の宿泊形式 ② 9月後半実施 ③ テーマ名「交響する身体」④ テーマに基づく京都大学教員による講義（午前）⑤ 同フィールド学習（午後）⑥ 同ゼミナール ⑦ キャンパスツアー（自由参加）という「京都大学仕様」についてである。プレキャンパスでは50歳以上という枠を設けていたが、年齢制限をはずして「中高年を対象とした」で統一された。

この「仕様」の評価に関しては10月10日付産経が詳しい。同紙は「シニアキャンパスはいろいろなタイプの教育を提供する京大の教育システムの一つ。『知』の集積地である大学として、新たな役割を提示したい」（尾池総長）という大学側の熱意と、「講義一つひとつに好奇心が刺激される。どれだけ吸収できるかわからないが、参加してよかった」という参加者の反応（工

学研究科高橋康夫教授の案内によるフィールドワーク「京の町屋-建築史の視点から」での取材)を立体的に記事構成している。産経の特集は国立大学法人化以降の大学経営の視点からのものであるが、こうした紙面を通して「シニアキャンパス」のモデル形成が行われ全国的に継承されていったことは想像に難くない。

4 第3期報道(2006・2007年)の特徴

「シニアキャンパス」のシンボルテーマとして編み出された「交響する身体」(生涯教育学講座 前平泰志教授)は、サブタイトルを「ひと・もの・自然を考える」(2005)「ひと・もの・自然の学びを編みなおす」(2006)「ひと・もの・自然が奏でる第三楽章」(2007)と変化させながらも、文理融合型の連携・継続事業としての「京大仕様」を巧みに演出する概念を供給し続けたと言える。2006年の報道では、このテーマを見出しにした読売(8月22日)をはじめ、京都(同4日)毎日(同23日)の各社ともにその紹介記事は、講座とフィールド学習が、統一テーマのもとに相互に関係しながら配置されていることを示す書き方に特徴がある。午後のフィールド学習についても「コース選択制で、希望に応じて花山天文台や総合博物館といった学外・周辺施設に移動し、天文学や人文科学、救急医療といった中から興味ある研究テーマを学習する」(読売)と新しい展開を示し、東山副学長の特別講義の後修了証書が渡される、最終日の日程にも言及されている。新たに開講された中学生対象の「ジュニアキャンパス」と、継続事業である「シニアキャンパス」とを、京都大学の大学開放事業として一体的に捉えた報道(8月3日付産経、同4日付京都など)も2006年報道の特色である。

2007年には雑誌「トロイア」(「クルーズ」4月別冊号)が特派員による詳細な「シニアキャンパス2006」ルポを特集記事「大学に行こう!」に掲載した。「シニアキャンパス2007」についても、花山天文台、付属病院薬剤部、芦生演習林、物集女キャンパス(「ホワイトナイル」ビール開発関係)など京都大学独自の施設利用でその真価が発揮されたものであっただけに、新聞各社の今後の報道が期待されるところである。

(辻 喜代司)